

繁用生薬の薬能

〈引用図書・文献〉

増補：増補能毒（1652）長沢道寿

薬選：一本堂薬選（1738）香川修庵

六八：増補片玉六八本草（1780）加藤謙斎

徴：薬徴（1794）吉益東洞

提要：薬性提要（1807）多紀桂山（訂補薬性提要：山本高明）

考：古方薬品考（1841）内藤尚賢

重徴：重校薬徴（1853）尾台榕堂

議：古方薬議（1863）浅田宗伯

養生：漢方養生談（1964）荒木正胤

中薬：中薬大辞典（1985）上海科学技术出版社

長沢：漢方薬物学入門（1993）長城書店

壺中：著者不明

目次

アキョウ 阿膠.....	4
ウズ 烏頭(トリカブト).....	4
オウギ 黄耆.....	5
オウゴン 黄芩.....	6
オウバク 黄蘗(キハダ).....	7
オウレン 黄連.....	8
ガイヨウ 艾葉(ヨモギ).....	9
カッコン 葛根(クズ).....	10
カロコン 栝楼根(キカラスウリ).....	11
カロジツ 栝楼実(キカラスウリ).....	12
カンキョウ 乾姜(ショウガ).....	13
カンゾウ 甘草.....	14
キキョウ 桔梗.....	16
キジツ 枳実.....	17
キッピ 橘皮.....	18
キョウニン 杏仁(アンズ).....	19
ケイシ 桂枝(シナモン).....	20
コウボク 厚朴(ホオノキ).....	22
ゴシユユ 呉茱萸.....	23
ゴミシ 五味子.....	25
サイコ 柴胡.....	26
サイシン 細辛.....	27
サンシシ 山梔子(クチナシ).....	28
ジオウ 地黄.....	29
シャクヤク 芍薬.....	31
ジュツ 朮.....	32
ショウキョウ 生姜(生のひね生姜).....	34
セッコウ 石膏.....	35
センキュウ 川芎.....	37
ソヨウ 蘇葉(シソ).....	38
ダイオウ 大黄.....	39
タイソウ 大棗(ナツメ).....	41
タクシャ 沢瀉(オモダカ).....	42
チモ 知母(ハナスゲ).....	43
チョレイ 猪苓.....	44
チンピ 陳皮(ミカンの皮).....	45
トウガシ 冬瓜子(トウガンの種).....	45
トウキ 当帰.....	45
トウニン 桃仁(桃の種).....	47
ニンジン 人参.....	48

バクモンドウ 麦門冬(ジャノヒゲ).....	49
ハンゲ 半夏(カラスビシャク).....	50
ブクリョウ 茯苓.....	52
ブシ 附子(トリカブト).....	54
ボウイ 防已.....	56
ボウショウ 芒硝.....	57
ボタンピ 牡丹皮.....	57
ボレイ 牡蛎.....	59
マオウ 麻黄.....	59
モクツウ 木通(アケビ).....	60
ヨクイニン 薏苡仁(ハトムギ).....	61
リュウコツ 竜骨.....	62

アキョウ 阿膠

増補：「味甘く温。手の太陰肺、足の厥陰肝、足の少陰腎の三経に入る。虚勞し極めたる人、そぞろ寒く瘡の如く煩い腰腹痛むに、鼻血に、吐血に、淋病に血をするに、走り痔に、痢疾に」。私曰く、この諸の能、虚証なくは用うべからず。殊更痢病には日久くなりて止むべきと思う時使うべし。「虚勞のシワブキに、喘息に、肺痿膿血を吐くに、虚勞して瘦せたる人、足痺れて久しく立つ事かなわざるに、女人の血の痛みに、血枯れて崩漏し、白血長血を煩うに、肺熱をさまし、乾きを潤し、陰血を補い、大腸を調う」。私曰く、この薬の目付けは、虚勞の人、気血の減り下りつくるを治し、淋病にてもあれ、痢病にてもあれ、吐血鼻血の類にてもあれ、血漏れて止まり難きを止まると心得て使うべし。この如く血の乱れ気のちり行なうを止める薬は大體酸き味にて無理におし止まる類のみなり。この故に事によりて用い難し。この薬、血の枯れたるをよく補い、熱気をさまし、潤いを生じ、虚勞極めたる人に殊更よし。本文に気の方とはなけれどもも気の散りゆく人に用いる事、なお口伝を聞くべし。

(毒) 「虚勞の人にてなくば用いるべからず。病を補い止める故なり」。

薬選：吐血、下血、衄血、溺血、崩漏、血下、欬嗽、唾血、虚勞羸瘦を療ず。胎を安じ、燥を潤す、諸淋熱痛。

微：諸血証を主治す。故に心煩して眠るを得ず者を兼治する。

提要：甘。平。血を和し、陰を補い、喘嗽を定し、小腸を利する。

考：味淡甘にして専ら補益を主る。故に虚勞虚煩、及び下血・吐血・血虚等を療ず。

議：味甘平。内崩・下血・腹腰痛・四肢酸疼・虚勞羸瘦・咳嗽を主る。血を和し、陰を滋し、風を除き、燥を潤し、痰を化し、小便を利し、大腸を調う。

養生：血毒症に用い、血を和し、陰を補い、喘咳を定め、小腸を利す。

ウズ 烏頭 (トリカブト)

提要：味功附子に同じ。而して専ら心腹寒湿を主り冷痰を逐ふ。

考：気味辛辣大熱、故に裏中を速走し寒淫を逐い疝痛を温導するの能有り。

議：味辛温。寒湿痺を除き、積聚を破り、胸上の痰冷、食下らず、心腹冷疾、臍間痛、肩胛痛み俛仰すべからざるを消す。

壺中：現在の市場品の烏頭はトリカブトの根をそのまま乾燥したもの、となっているが、実際は少しばかり加熱減毒加工している。そんなに恐ろしい物ではない。煎じる時間が少ないと中毒の恐れがあるので、50～60分煎じるのが望ましい。散薬には使用しないほうが安全である。冷えによる★を透徹する効がある。

オウギ 黄耆

増補：「味甘く微温。手の太陰肺経、足の太陰脾経に入る。肺気を補い皮膚を強くす」。私云う、黄耆は大略人参の能に似たり。皮膚を厚くする所に心を付けて使うべし。「自汗、盗汗に必ず用ゆ。皮膚の熱気を去る」。私云う、皮膚の熱気にも虚したる人には用ゆ、強き人には用いず。「風をひきやすき人に瘡膿出て後に用いれば肉を生ず。虚してシワブキし喘息するに、咽の乾くに」。私曰く、人参の口伝の如し。

「虚して耳鳴りに」。私曰く、内経曰く、耳鳴り九竅通ぜざるは腸胃の生ずる所とある心ぞ。是を見れば人参と大略能毒同じものなれども、少し変わる事あり。腎虚にも人参ほどは忌まずなり。但し王綸と云う人は黄耆をも人参の如く火動の病には忌よたぞ。

(毒)：「自汗・盗汗ありとも寸脈強くして胸苦しきには」。私曰く、丹溪が療治をみれば、胸に気のつかえてあるものに人参より強く嫌う

たぞ。

薬選：痘瘡を療じ、内托、助発して津を行す。癰疽、久敗瘡、膿を排す。

徴：肌表の水を主るなり。故に能く黄汗、盗汗、皮水を治す。又傍ら身体腫れ、或いは不仁なる者を治す。

考：気味甘く、温芳達。故に専ら虚を補い、元気を益し、衛分を固実す。桂枝の発表と同じく用ゆるときは則ち能く表に達す。以て黄汗、白汗、盗汗を治す。

重徴：肌表の水を主治す。故に皮水、黄汗、盗汗、身体腫れ、不仁を治す。兼ねて疼痛、小便不利を治す。

議：味甘く微に温。膿を排し、痛を止め、肉を長じ血を補い、渴、腹痛を止め、虚劳自汗を治し、肌熱及び諸経の痛を去る。

養生：肌表の水毒をとる。皮膚の水疱、麻痺、疼痛をとり、元気を増し、黄汗を治す。

オウゴン 黄芩

増補：「味苦寒。手の太陰肺経、手の陽明大腸経、足の太陽膀胱経、足の少陽胆経、手の太陰脾経の劑なり。上焦の熱気に、シワブキし喘息するに」。私云う、肺熱のシワブキ喘息にはよし。寒より発りたるには必ず用いず。「寒熱往来するに、上気し目腫れ痛むに、熱毒に」。熱毒とは熱気より発りたる瘡などの事ぞ。「諸熱の黄疽に、熱より発りたる頭痛に、熱のしぼり腹に」。私云う、必ず用う。「熱の淋病に、鼻血に、下血に、産前に腹中安ぜずして子騒ぐに」。私曰く、必ず白朮を加える。尚口伝あり。「産後の熱気に」。私曰く、人によりて斟酌

すべし。私の口伝に曰く、この薬は上焦の熱気を能くさまし、肺の臓、大腸の熱を去ると心得れば使われるぞ。理慶曰く、熱気をさますに表にあらば汗し、裏にあらば下すべし。下しもせられず汗もならず唯熱気をさまさんと思う時は黄芩を必ず用うべし。亦苦く寒なる故に老虚の人、腹中衰えたるには酒にて炒りて猶よし。亦湿熱によし。そうじて苦寒の薬は湿熱によしと心得るべし。

(毒)：「寸口の脈沈細にして身冷えシワブキするに」。私曰く、とにかく冷えたる煩いには毒と心得るべし。

薬選：諸熱、傷風時疫の大熱、潮熱、膚熱療くが如く、胃熱口瘡爛痛、牙疼、咳嗽、吐血、衄血、下血、血淋熱痛、痢疾腹痛、瘧熱、熱渴、目中腫赤、翳膜、小腹絞痛を療じ、胎を安じ、喉腥、胸中を利す。

徴：心下痞を治すなり。傍ら胸脇満、嘔吐、下利を治するなり。

提要：苦。平。火を瀉し、湿を除き、黄を去り、熱利を止める。

考：気味苦く寒。故に其れ能く実熱を清涼し、膀胱を通利し、以て不利を治す。

重徴：心下痞を主治す。兼て胸脇苦満、心煩、煩熱下利を治するなり。

議：味苦辛。諸熱、黄疸、洩痢を主り、小腸を利し、擁気を破る。

養生：心下の痞えを主治する。熱を瀉し、湿をとり、胸中の悸、下痢、発黄を治す。

オウバク 黄蘗 (キハダ)

増補：「味苦く寒。足の少陰腎、足の太陽膀胱の二経に入る。五臓腸胃の内

の結ばおれ、熱に、黄疸に、血混じりたるしぼり腹に、熱のあるサワリに、走り痔に、白血・長血に、悪虫を殺す」。私云う、右の病証皆湿熱なり。「皮膚熱して赤くなるに、目の熱して赤く痛むに、諸瘡の痛みに、骨蒸勞熱に」。私曰く、是皆相火の証なり。按ずるに、この薬は腎・膀胱の熱を瀉し、脾胃の湿熱を除く妙劑なり。この性を考え使うべし。他流には多く用いず、丹溪流には必ず用いる薬なり。また四物湯に知母・黄蘗を加えて補陰の神薬なり、丹溪が方なり。委しくは口伝。

(毒)：「四物湯に知母黄蘗を加えて久しく服すれば胃を破りて陰を生ずる事能わず」。私云う、是誠に用薬の手本なり。そうじて補陰の薬は脾胃にたたるべし。脾胃衰えては補陰の薬を服しても益なきのみに非ず。またかえって損を加える。委しくは口伝。

薬選：蟲を殺し、腸胃の結熱、熱痢、目熱赤腫を療ず。

提要：苦。寒。火を降し、熱を清め、湿を去り、黄を除き、腎燥を潤す。

考：気味極めて苦く、寒降。以て皮間の鬱熱・黄疸を治し、二腸中の結熱を除く。

議：味苦寒。結熱黄疸を去り、洩痢を止め、蛔心痛、鼻洪、腸風、瀉血を治す。

養生：胃の湿熱を取り、黄疸を治す。

壺中：粉末を卵白で練ったものを打撲やねんざにシップすると特効がある。

オウレン 黄連

増補：「味苦く寒。手の少陰心経に入る。熱氣の目の痛みに、涙出るに、熱の痢病に」。私云う、初めて熱痢を病むには大略用ゆ。但し虚証ならば嫌なり。「口中の瘡に」。私云う、心熱を去る故に口の瘡とは雖も、上焦の瘡には何処にもあれ黄連・黄芩は用いる薬なり。「熱の疳に」。按ずるにこの薬は能毒性味、大体黄芩と同じ。但行く所が違ふ。黄芩は肺・大腸の薬、黄連は専ら心熱をさますなり。また脾熱をもさます故なり。

(毒)：「虚冷の泄瀉に。冷えて瘦せたる小児の疳に」。

薬選：天行熱病、協熱泄、痢疾、噤口痢、暴発赤眼、皆傷、爛弦、泣出、傷風寒結胸を療ず。蟲を殺し、吐衄を治す、小児の鬱熱を解し、痞気、腹痛を止む。

徴：心中煩悸を主るなり。傍ら心下痞、吐下、腹中痛を治す。

提要：苦。寒。心に入り火を瀉す。肝を鎮め血を涼ず。湿熱を清し鬱を散ず。

考：味極めて苦く寒降。故に其れ能く血熱に勝ち、心臓の実火を瀉し、以て譫語、煩乱、吐血衄血を治す。

重徴：心中煩悸を主り、兼て心下痞、吐下、腹中痛を治す。

議：味苦寒。熱氣、腸澼、腹痛、下痢、煩躁を主り、血を止め、口瘡を療ず。

養生：胸中の煩悸を主治する。精神の不安を鎮め、熱を瀉し、充血を取り、心下のつかえ、下痢を治す。

ガイヨウ 艾葉 (ヨモギ)

提要：苦辛。温。気血を理し、寒湿を逐い、子宮を煖める。

考：気味苦く収斂にして芳達なり。故に泄痢を療じ、妄血を止めるの能あり。

議：味苦温。下痢、吐血、婦人漏血、帯下を主り、腹痛を止め、百病を灸す。

養生：気血をととのえ、出血を止む。

壺中：浴剤として使用すると湯ざめせず、冷え症によい。乾燥肌や皮膚炎にもよい。乾燥肌のひどい者には煎じ液で湿布するとよい。

カッコン 葛根（クズ）

増補：「味甘く微寒。手の陽明大腸、足の陽明胃の二経に入る。傷寒・中風の頭痛に」。私曰く、太陽の初発には忌むなり。口伝を聞くべし。是を思う時は、傷寒の初発には香葛湯はすかす方なり。「肌を解し表を發し汗を出す。痘疹出難きに」。私曰く、痘疹は陽明にかかる、其の上發表の力ある故に必ず用う。但し自汗出て虚冷の小児には忌むなり。「消渴身熱するに。胸中煩熱するに。酒毒を消す。胃を開き、また食を下す。往来の温瘧に」。私曰く、これは胃中の熱気を去りて津液を生ずる能ある故なり。胃の気虚して咽乾く人に必ず用うべし。按ずるに、この薬は三つの能あり。一つには邪気の陽明の経にあるを發散す。二つには胃虚して津液なきを潤す。三つには陽明の引経の薬なり。この目付けにて使うべし。

(毒)：「脈沈細にして自汗あるに多く用いれば胃の気を損ず」。私云う、この薬の胃に功ある事は熱邪を去り津液を生ずるによってなり。

熱去らば去るべし。久しく服すれば表を発し下気の劑なり。必ず胃の
氣を破るべし。

徴：項背強を主治するなり。傍ら喘して汗出るを治する。

提要：甘。平。肌を解し熱を退け、津を生じ渴を止め、嘔を収め毒を解す。

考：氣味苦く甘く微に収。其の質潤通涼降。故に能く鬱熱を清瀉し、胃中
を調和す。乃ち之を桂枝の發表を以てするときは則ち項背強急の陽分
を療ず。葛根湯、桂枝加葛根湯の類、是なり。或いは之を合するに芩
連の涼降を以てするときは則ち下利喘逆等の裏分を治す。葛根芩連湯
の所以なり項背強急を言わずなり。

重徴：項背強急を主治するなり。兼ねて喘して汗出るを治す。

議：味甘平。大熱を主り、肌を解し、腠理を開き、津液を生じ、筋脈を舒
ず。

養生：項背の強急を主治し、表位にある熱毒をしりぞけ、渴を止め、体液を
生ず。

カロコン 栝楼根（キカラスウリ）

増補：「味苦く甘く寒。肺・心・脾・胃・小腸の五経に入る。消渴して身熱
するに、胸中に熱氣が溜りて有るに、黄疸に、一身乾いて痒きに、乳
の出ざるに、乳房の腫れたるようにしてネプトなどの熱に」。私曰く、
目付けどころは栝楼実と同じ。変わる所は、実は強く重し、根は軽く
弱し。

(毒)：「上焦の冷えたる人に。実の毒、是に同じ」。

薬選：嗽、身熱、唇乾、口燥、煩渴、腹満、腸胃中の痼熱、癰癤結核、胃熱口瘡を療じ、腫を消し、乳を通じ、津液を行らし、沸子（アセモ）に撲（ツケル）し、汗爛（アセタダレ）に粉す。

徴：渴を主治す。

議：味苦寒。消渴、身熱、煩満、大熱を主り、小便の自利を止め、膿を排し、腫毒を消し、津液を行らす。

提要：味苦く微に甘。質涼降滋潤なり。故に津液を生じ、燥渴を潤すの能有り。

養生：虚熱をとり、中焦を潤し、渴を止める。

カロジツ 括楼実（キカラスウリ）

増補：「味苦く寒。心・肺・脾・胃・小腸の五経に入る。心肺の乾きをよく潤す。同じく火を下す。口乾くに固まりて出難き痰に」。私曰く、熱より発りたる胸痞とは、胸の内痛みもせず、痒くもなけれども、胸塞がりて、えもいわれぬ気味の悪しきを云う。世間の人、胸かくと云う是なり。「瘡の毒を消す」。私曰く、目付けどころは上焦をよく潤し、熱気を去ると心得るべし。油のある故に、殊の外潤すぞ。

徴：胸痺を主治するなり。傍ら痰飲を治す。

重徴：痰飲を主治す。故に結胸、胸痺、心痛、喘息、咳唾を治す。

議：味苦冷。胸痺を主り、心肺を潤し、咽喉を利し、胸膈、鬱熱を去り、痰結を蕩い、嗽を治す要薬と為す。

提要：甘。寒。潤下。胸中の鬱熱を除き、痰を消し、津を生ずる。

考：其の瓢滑。味甜く微に苦。其の子、味淡甘微に苦、脂多し。俱に滑沢

順降。故に善く胸痺、結胸を療じ、滯氣、勞倦等を泄す。

養生：胸膈にとどまる水毒を潤下する。

カンキョウ 乾姜（ショウガ）

増補：「味辛く大熱。能毒大略生姜に同じ」。変わるところは大熱にして気を散ずる事甚だし。痰を去るの神薬なり。生姜もまた痰を能く去るなり。産後の熱をさます。口伝。

(毒)：「陰虚火動に。脈実数なるに」。私曰く、辛熱なる故に熱病に忌む。

薬選：泄瀉、乾嘔、咳嗽を療じ、気を下し、胃を開き、食を進め、血を止め、中を温め、寒冷腹痛、傷食吐瀉、痰を消し、翻胃、宿食を消し、冷氣を去る。附子と善く脱せんと欲する気を回す。久虚の痢疾を和す。

(弁正)：嘔を止め、胃を開き、汗を発するは、互いに（生姜と乾姜）に相通用すべし。而して嘔家は生姜、尤も良なり。元気を挽回し、中を温め、瀉をとむるに至っては、則ち乾姜に非ずんば能くすべからず。何ぞ混同すべきや。

徴：結滯の水毒を主治するなり。傍ら嘔吐、咳、下痢、厥冷、煩躁、腹痛、胸痛、腰痛を治す。

重徴：結滯の水を主治するなり。故に乾嘔、吐下、厥冷、煩躁、胸痛、腹痛、腰痛、小便不利、自利、咳唾涎沫を治す。

議：味辛温。中を温め、血を止め、吐瀉、腹臑冷え、心下寒痞、腰腎中疼冷、夜に小便多きを主る。凡そ病人、虚して冷えるは宜しく之を加え

用いるべし。

提要：辛。熱。寒を逐い経を温め、胃を開き、肺氣を利し、寒嗽を止める。

考：其の味辛く温。以て能く経脈を宜通し寒邪を逐い、胃中を温む。

養生：上迫する水毒を温散する。四肢の厥冷咳逆、嘔吐、眩暈、腰腹の冷感や痛み、小便の自利に効あり。

壺中：日本薬局方の生姜（乾燥品）は古方では乾姜であり、八百屋で売っているヒネ生姜が古方の生姜である。日本薬局方の生姜は熱薬であるので、陽実証に生姜の代用品として使う場合は分量に注意すべし。（大柴胡湯・越婢湯など）

カンゾウ 甘草

増補：「味甘く微寒。手の少陰心経、足の太陰脾経に入る。炙れば微温」。

私曰く、甘草に限らず何の薬も炙れば温になる事多し。たとえ温に変ぜねども大寒は微寒になるなり。黄芩・黄連などは常には火を忌めども、老人虚人には寒を恐れて炒りて使う事多し。「百薬の毒を消す」。私曰く、百薬とは諸薬と云う事ぞ。味甘く柔らかなる故に何の毒をも消すなり。この故に当流には甘草を使わぬ事多くは無きぞ。相畏・相悪・相反とて中の悪しき事あり。甘草を入れれば戦わずぞ。是を以て国老の名あり。諸急を緩くす。この故に寒薬に用いれば寒を緩くす、熱薬に用いれば熱を緩くす。「咽の病に、咳嗽に、万の薬を引いて上へ昇す。甘草の梢は茎中の痛みを治す。胸中の熱氣に」。

(毒)：「中満に」。私曰く、甘草に限らず甘き薬は中満には忌むべし。

「下焦の急痛に」。私曰く、物を緩くする故に諸薬の力、下焦まで行

きまじきとの心なり。「汗薬に」。私曰く、古方を見るに入れたぞ。上行の能ある故か。然るを道三の汗薬に嫌われたは是も物を緩うする程にぞ。汗薬は急にしたき故なり。「下薬」に。私云う、是も薬の力を緩うする故なり。

薬選：諸薬を和し、衆味を緩やかにす。咽痛を治し、茎中の痛みを去り、百毒を解す。

徴：急迫を主治するなり。故に裏急、急痛、攣急を治す。而して傍ら厥冷、煩躁、衝逆等、諸般急迫の毒を治すなり。

提要：甘味平性、脾胃の不足を補い、十二経の緩急を通行し、諸薬を協和させ、百薬毒を解す。

考：味甘美にして涼降。故に其の能、中州を緩にし、百薬を協和す。以て拘急、卒痛、咽痛、燥渴等を治す。凡そ駿剤を用いるときは必ず此れを加えて、以て胃気をして傷せらせずしむ。

重徴：急迫を主治するなり。故に厥冷、煩躁、吐逆、驚狂、心煩、衝逆等、諸般の急迫の証を治す。兼ねて裏急、攣急、骨節疼痛、腹痛、咽痛下利を治す。

議：味甘平。毒を解し、中を温め、気を下し、渴を止め、経脈を通じ、咽痛を去る。

養生：急迫症状を緩め、咽痛、腹痛、歯痛、痔痛、下痢の激しいものに効く。諸薬に伍して薬力を安定する。

長沢：鑑別の点からいきますと薄い黄色のものは避けた方がよい、できるだけ色の濃いものを選びということです。そして味わった時に、甘味が強く苦みが少ないものが品質の良いものになります。

壺中：充実して甘みの強く、えぐみの少ないものを使う。

キキョウ 桔梗

増補：「味辛く苦く微に温。太陰肺経に入る。腹中を温め五穀を消し気を養う」。私曰く、この薬は上の三つの能ありと心得ておくべし。腹中を温めると云えばとて温め薬に用い、五穀を消すとて食積の人に使わんと思ふべからず。この心持ちは桔梗一種に限らず、余の薬も表の能をよく用いて裏の能をば使うべからず。その当病によき薬、外に多きほどにその薬を用ゆべし。「喉痛に」。私曰く、必ず用ゆべし。そうじて喉の痛みには何にも用いよ。「胸脇の痛みに、鼻塞るに、シワブキ喘息に、肺癰に、痰涎に」。私曰くこの薬は肺氣を開く故に、上の能あり。「諸薬を上焦におかんとする時に」。私曰く、目付けどころは肺の臓の壅りたるをよく開き、万の薬を上に乗せんとする時、甘草と桔梗と二味使えば、諸薬を下へ下さぬ故に、舟楫（天子を補佐する家来のたとえ）の剤と云うなり。また辛く苦き故に解利の薬とも見えたぞ。また腹の痛みに丹溪の使われたぞ。面白き療治ぞ。腹痛門にて申すべき。

(毒)：「腎虚に、平生腹を立て上気する人に」。私曰く、舟楫の心有る故に嫌うたぞ。また本経に寒たる吐逆に用うとあり、此の薬は腹中を温むるほどに、冷えたる吐逆にはよからんづれとも、初心の人のために用捨して今は是を退けたぞ。その心は吐逆は気の上へ逆上する病なり。舟楫の心ならば嫌なり。かようの事はその病に望んで計らうべし。

薬選：咽喉腫痛、胸脇痛、胸膈滞気、赤目腫痛、口舌瘡を生じ、喉痺を療じ、

膿を排す。

徴：濁唾、腫膿を主治するなり。傍ら咽喉痛を治す。

提要：苦辛。平。肺に入り、熱を瀉し、痰を除き、咳を治し、頭目を清め、咽喉を利し滞気を散じ、薬を載し上浮す。

考：其の根苦く辛く毒有り。故に能く滞気を除き、咽喉を裕利し、肺気を清くす。

重徴：濁唾、腫膿を主治するなり。

議：味辛温。胸脇痛むこと刀刺の如くを主る。咽喉痛を療じ、痰を消し、癥瘕を破り、血を養い、膿を排し、覈を利し、嗽逆、口舌に瘡を生じ、赤目腫痛を治す。

養生：咽の腫痛、排膿を主治する。

壺中：桔梗は晒して白くしたものではなく、茶褐色の生干しの香りの良いものを使用する。

キジツ 枳実

増補：「性味能毒、おおかた枳殻と同じ。心脾二経に入る」。枳殻と変わる
ところ枳殻は上焦の気を下し、枳実は下焦の血を下すと心得るべし。但し当
流の口伝には、あながち使いわけず、枳殻の性は緩く、枳実の性は強しと分
別して、軽き病には枳殻、強き病には枳実を使うべし。この薬は痰を下す事、
垣を押し倒すよりも速やかと見えたり。

薬選：胸膈痰滞を除き、結塞を破り、脹満を消し、痢疾を治し、風瘡★、心

下急痞痛、上気喘咳、傷風寒、結胸を療ず。目を明らかにし、食を消し、胃を開き、痔を熨す。凡そ胸脇間の疾は蓋し之を主る。

徴：結実の毒を主治するなり。傍ら胸満胸痺、腹満腹痛を治す。

提要：苦酸。微に寒。気を破り痰を行らす。胸膈を利し、腸胃を寛む。

考：味極めて苦辛、気芳烈。故に善く膈気を降泄し、痞癖を排し、結実を破るの効有り。

重徴：結実の毒を主治するなり。故に胸腹の満痛を治す。兼ねて胸痺、停痰、癰膿を治す。

議：味苦寒。寒熱の結を除き、痢を止め、胸脇の痰癖を除き、停水を逐い、結実を破り、脹満を消し、心下急痞痛、逆気喘咳を主る。

養生：結実、気滞の毒を破り、胸満、胸痛、腹満、腹痛を治す。

キツピ 橘皮

徴：呃逆を主治するなり。傍ら胸痺、停痰を治す。

提要：辛苦。温。中を調え、膈を快し、滯を導き、痰を消し、気を理め、湿を燥す。

考：気味苦く辛く芳発なり。故に其の能、逆気を降泄する。仲景氏は生姜と併用す。以て乾嘔、吃逆の気塞等を治す。

重徴：噦逆を主治するなり。兼ねて胸痺、停痰、乾嘔を治す。

議：味辛温。逆気を主り、嘔、咳を止め、痰涎を消し、胃を開き、水穀を利し、魚腥の毒を消す。

養生：気逆、吃逆を主治し、気を下し、胃内の停水を去る。

キョウニン 杏仁 (アンズ)

増補：「味辛く甘く温。肺、大腸の二経に入る。よく胸中の気を快く散す。上気に、喉痺に、痰つかえてシワブキし喘息するに、シャックリするに、大腸に気つかえて大便結するに」。私曰く、夜大便の結するは血の方なり。その時は桃仁を用いよ。昼結するをば気と心得て杏仁を使うべし。「汗を発す」。私曰く、この薬の目付けは胸中を快くして遡る気を下すと思うべし。故に喘息には必ず是を用ゆ。少し潤す心もありて使いよき薬なり。

(毒)：「気虚甚だしき人には」。私曰く、枳殻などの如くに忌むまいぞ。甘辛く、散するほどに気虚したる人には少し容赦せよとの心なり。

薬選：痰喘、邪咳を療ず。煩を解し、腸を潤す。

徴：胸間停水を主治するなり。故に喘咳を治す。傍ら短気、結胸、心痛、形体浮腫するを治す。

考：味甘く微に苦。専ら気分を主る。其の能、咳逆を下し、痰喘を除き、以て胸膈を利して、腸間を潤す。

重徴：胸間停水を主治するなり。故に能く喘を治す。兼ねて心痛、結胸、胸痺、短気、浮腫を治す。

議：味辛温。気を下し、肌を解し、結を散じ、燥を潤し、欬逆上気を主り、狗毒を殺す。

養生：気を下し、胸間の停水を治す。喘を止め、心痛、短気を治し、狗毒を

解く特効あり。

ケイシ 桂枝（シナモン）

増補：「味甘く辛く大熱。心・肺・脾・腎の四経に入る。胸腹冷えて痛むに、十二経脈冷えて脈遅きに、血衰えて手足冷えるに、表虚して自汗出るに、脾胃を温め、血を破り経脈の中風に、身の内の痛みに、冷えて痺るるに」。私曰く、此の薬は大いに血を温め十二経を通ずると心得て使うべし。何にてもあれ、温めるべきと思うには大方此の薬を用いてよし。気血ともに冷えて脈切れたる病人、または冷えてモガサ（痘瘡）などの出がたきと、霍乱のコブラガエリに用う。速やかにしるしを得たりと、理慶は申されたり。桂枝は血中の気薬にして、浮かみたる汗を出して汗を止めるなり習いあるぞ。但し傷寒の汗薬には悪しし。傷風の汗薬にはよし。目の付けどころは表裏ともに温め、気を散らし、血を通ずると心得るべし。

(毒)：「脈数に、妊みたる人に」。私曰く、九ヵ月、十ヵ月より用うべし。

薬選：傷風寒を療じ、汗を発し、肌を解し、中を温め、気を下し、煩を止め、渴を止め、腠理を開き、関節を利し、奔豚を治し、水道を導き、月閉を通じ、難産、胎衣下らずを治し、癰疽、痘瘡の内托、百薬を宣導し、畏忌する所無く、諸薬の先聘の通使と為す。

徴：衝逆を主治するなり。傍ら奔豚、頭痛、発熱、悪風、汗出、身痛を治す。

考 : 桂の物為る、純陽発散。其の枝の性は自ずから表部に達し、皮の性は自ずから肌膚に走る。味辛熱、甘和にして芳発の氣有り。以て善く発表の先鋒を致すなり。故に仲景氏、肉桂を用いずして専ら桂枝を用うるは、其の枝皮以て発表に利しきの義を取れり。其れ麻黄湯、大小青龍湯、葛根湯等の発表の功有るは、皆桂枝の力に因りて致す所なり。故に此れを以て発表の宰宗と為すなり。

重徴 : 上衝を主治するなり。故に奔豚、頭痛、冒悸を治す。兼ねて発熱、悪風、自汗、身体疼煩、骨節疼痛、経水の変を治す。

議 : 味辛温。関節を利し、筋脈を温め、煩を止め、汗を出し、月閉を通じ、奔豚を泄らし、諸薬の先聘通使と為す。

養生 : よく氣血をめぐらす。氣の上衝を下し、筋脈をゆるめ、肌表の邪氣を発解し、頭痛をとり、身体の疼痛、経水の変を治す。

長沢 : どういう薬効を持っているか簡単に言いますと、発汗、解熱、健胃、鎮痛作用があります。それから血をめぐらす、利尿、鎮静などの作用もあります。また、腎臓にも作用します。桂皮の品質の見分け方ですが、小さく折ってそれを口に入れて噛みます。その時に甘味も辛味も強い物が上等なわけです。辛味が弱くて甘味の弱いのは勿論だめです。もう一つの要素として粘液が口の中に出てくるものがあります。これは品質の落ちる1つの指標になります。ですから噛んでみて粘液質だというように思った物は品質が2級とか3級とかと思えばよいわけです。

壺中 : 桂枝を用いず桂皮を用いる。噛んでみて辛いものを選ぶ。厚みがあっても辛くないものは次品である。

コウボク 厚朴 (ホオノキ)

増補：「味苦く辛く大熱。脾胃二経に入る。霍乱に、腹痛に、脹満に、胃の気冷えて吐逆するに、しぼり腹、下り腹に」。私曰く、しぼり腹には常に用いて然るべし。殊に幼き人などのしぼり腹によし。下り腹には殊により人によりて斟酌すべし。「食の消えかするに、肺気脹満し喘息しシワブキに、虚して小便清難きに」。私曰く、腹中虚して冷えるに用うべき。但し煩いによるなり。「虫を殺し、痰を去り、腹中を温め、気を下す」。私曰く、この薬はよく腹中の滞りを温め散らし、気を下すと心得るべし。是も下し薬の一種なり。

(毒)：「腹中脹満するとも虚弱の人には斟酌すべし。誤りて用いれば元気を損なうなり。孕みたる女に」。私曰く、若し脹満せば虚弱の人なりとも用うべし。多く用いぬように心得るべし。故に斟酌せよと云うたぞ。

薬選：瘧疾、腹満、喘息、咳嗽を療じ、痰を消し、気を下し、痢疾、傷食、宿食消せず、乾嘔止まず、傷風寒、翻胃吐食。

徴：胸腹脹満を主治するなり。傍ら腹痛を治す。

提要：中を寛め、鬱滞を化し、湿を去り、満を散じ、胃気を平にし、痰飲を消し、虫積を治す。

考：気味苦く辛く温にして下降す。故に逆気を下し、腸胃間の宿湿を疎瀉するの能有り。

重徴：胸腹の脹満を主治するなり。兼ねて腹痛、喘を治す。

議：味苦温。痰を消し、気を下し、結水を去り、宿血を破り、水穀を消化

し、大いに胃気を温むるを主り、腹痛、脹満、喘咳を療ず。

養生：胸腹部の膨満を主治し、気を下し、中焦をゆるめ、胃内停水をとる。

ゴシユユ 呉茱萸

増補：「味辛く苦く大熱。肝・脾・胃・大腸・腎の五経に入る。中を温む」。

私曰く、能く考えみるに、三焦ともに温むるなり。「気を下し痛みを止む」。私曰く、殊に心痛によし。冷えならば苦寒の佐使薬なくとも苦しかるべからず。但大体心痛も熱より生ずる。ままこの薬を君薬とすべからず。常に山梔子、黄連を君として、この薬を佐使に加えて使うべきなり。是は寒は熱によりて用いると云う心なり。「鬱を開き、滞りを散ず」。私曰く、この心にて心腹痛の冷えより発りたるに宜し。但鬱を開くとて香附子、川芎、木香などの如くには使われぬぞ。使いようは寒か気か痰か食か、滞をなして鬱したるとき開きて散ぜんと思ふときに使うべし。かようのあて処なくは使うべからず。「虫を殺す、痰涎の頭痛に、陰毒の腹痛に」。私云う、陰毒とは天地不正の寒気、邪気を云うなり。「疝気に」。私云う、茴香の下にて云う如く、疝気は先ず温めねばならぬ事なり。故にこの薬を用う。度々使いたるが疝痛には妙にしるしあるなり。但茴香、陳皮などにてあしらいても然るべきはおいたがよいぞ。「脚気胸へ衝くに」。私曰く、胸へ衝くと云うを目当てに用いよ。脚気の初めて発るときは傷寒とかわらぬものなり。見分けようは、療治の口伝のとき語るべし。脚気も久しく病みておる人には用いず。但し寒熱甚だしくは用いるべくが其の仕儀によるべし。「心腹冷えて痛むに、呑酸に、吐酸に」。私云う、吐酸とは喉

の内酸く覚えて、飲めども入らず、吐けども出ぬを云うなり。吞酸とは吐き出だすもの酸きなり。この薬に黄連を加えて用いよ、妙なり。丹溪が法を療治の口伝にて語るべし。目付けは大熱猛気の剤なれば上中下焦の寒湿を推し下す神薬と心得て、上の能ばかり用うべし。

(毒)：「久しく用いれば目を損し髪抜け元氣虚す」。

薬選：心腹感寒、絞痛、産後心痛を療ず。中を温め、疝氣、宿酒を消す。

徴：嘔して胸満を主治するなり。

提要：辛。温。小毒有り。中を温め、氣を降し、鬱滯を開き、寒痛を治し、湿を除き、虫を殺し、瀉を止め、痰を化す。

考：其の味辛苦、温熱にして順降。故に能く腸胃を温め、水湿を除き、寒湿を散じ、心腹の冷痛、寒疝等を療ず。

重徴：嘔して胸満、及び吐利を主治するなり。

養生：嘔して胸満し、吐利するものを治し、寒を散らす効あり。

議：味辛温。中を温め、氣を下し、痛みを止め、鬱を開き、滯を化し、嘔逆、蔵冷を除き、吞酸、痰涎、頭痛を治するを主る。

中薬：中を温める、止痛する、氣を理える、湿を燥す、の効能がある。嘔逆吞酸、厥陰頭痛、臟寒吐瀉、完腹脹痛、脚氣、疝氣、口瘡潰瘍、齒痛、湿疹、黄水瘡を治す。

長沢：温める力が大変強いから大熱薬に入ります。（中略）吞酸嘈囉という、酸っぱい胃液が出てきて胃が非常に悪いという状態を呉茱萸単独で治すことができます。ですから胃腸病に広く使えます。また、その中に入っている特有の成分が鎮痛作用や利尿作用も持っていますから、その応用は非常に広いものだということがわかります。胸や心臓の異常

にもこれを使うことができますし、胃内停水のために吐き気が強いとき、頭痛が激しいときにも治すことができます。大変応用範囲が広いということがわかります。

ゴミシ 五味子

増補：「味酸く温。肺腎二経に入る」。私曰く、五味の備わる故に五味子と名付けたり。「久しくシワブキするに、喘息に、乾いて声枯れシワブキするに、身の潤いを生じ喉の渴きを止む。腎精を益し、目を明らかにす。元気の不足を補い、気の減り散りたるを治す」。私曰く、この薬は潤いを生ずる事を主り、元気の不足を調べると心得て使うべし。元気とは精気なり。精気を益すこと、地黄・枸杞子などのように専ら左腎の水を生じはせぬぞ。また胡椒・肉桂などのように右腎の火を盛んにするでもないぞ。すべて腎精と云うは水火和合していてくる物なり。水ばかりにてもなし。則ち父母交合の時、一二の気のむすぼれたるを云うぞ。故に精は身に先だつて生ずと経に見えたぞ。但この薬は右腎を補うかたへよるべきか、されども補陰丸の方に入りたぞ。知母・黄蘗・地黄などと同じく用いれば水をも生ずるぞ。また夏月に気衰えよろず難しく心よからざるには人参、黄耆、麦門冬と組合せ用いれば気力強く筋骨盛んになると云うぞ。また遜真人は五月に五味子を用いれば頓に精気を生ずと云えり。畢竟この薬の使いようは潤いを生じ元気を補うと心得て、久しきシワブキと腎虚の人には少し用うべきの重き薬なれば一度に多くは使わぬぞ。

(毒)：シワブキを治するに風寒より発りたらばこの薬をば慌てて用いぬものぞ。其の心は味酸き故にねつきを散らさずして悪しし。但し古

方に初発のシワブキに用いたる事多し。すべて両方を組む時は能毒の
使いよう一薬ごとの吟味はせぬものなり。口伝。

徴 : 咳して冒する者を治す。

提要 : 温。五味備わる。肺を斂し、腎を滋し、津を生じ、嗽を寧し、精を生
し、瀉を止める。

考 : 味酸鹹。収降。故に其の能、涸渴を潤暢し、肺気の逆上を鎮瀉して、
以て咳嗽喘息を治す。

重徴 : 咳逆を主治するなり。兼ねて渴を治す。

議 : 味酸温。 逆上気を主り、渴を止め、煩熱を除く。

養生 : 気を下し、咳逆をしずめる。頭冒を治す効がある。

サイコ 柴胡

増補 : 「味苦く微寒。肝・胆・心胞絡・三焦・胃・大腸の六経に入る。寒熱
往来に」。私曰く、必ず用うべしが胸脇の痛みに。「目の旋るに、頭
痛するに、勞瘵骨蒸に、耳鳴りつぶるるに、目赤く昏きに、瘧に」。
私曰く、初発に用い、気を引きて上へのぼすぞ。少陽の経の薬なり。

「衄血に、脈弦にして筋引き攣るに」。私曰く、何れの病にてもあれ
寒熱往来するに必ず用うべし。理慶曰く、常に熱気を冷ますべしと思
うには黄芩と同様に用うべし。黄芩より味わい薄く性も軽し。故に小
児の熱気には常に用うべし。肝胆の本薬なり。

(毒) : 「脈虚にして遅に」。私曰く、是も冷えたる人に嫌う故なり。

薬選 : 傷風寒、時疫内外熱、潮熱、往来寒熱、瘧の状の如く、諸熱、肌熱、

婦人熱血室に入り、瘧疾、腸中停積、目昏、赤つう、障翳を療じ、血結、氣聚を解す。

徴：胸脇苦満を主治するなり。傍ら寒熱往来、腹中痛、脇下痞鞭を治す。

提要：苦。微寒。少陽の邪を発し、熱を退け陽を升し、結気を散じ、経血を調え瘧を治す。

考：気味苦辛芳散。故に善く結気を泄利し、表を防ぎ裏を和し、以て往来寒熱、胸脇苦満、微煩、瘀熱等を治す。

重徴：胸脇苦満を主治し、兼て寒熱往来、腹中痛、黄疸を治す。

議：味苦平。心腹を主り、寒熱邪気を去り、煩を除き驚を止め、痰を消し、嗽を止め婦人の産前後の諸熱及び熱血室に入り経水調わずを治し、血気を宣暢し、気を下し食を消す。

養生：胸脇部の邪をとり、表裏の熱を退け、結気を散じ、経血を調えマラリヤを治す。

サイシン 細辛

増補：「味辛く温。心・肝・胆・脾の四経に入る。中を温め気を下し、痰を破る」。私曰く、三つの能は覚えておくべし。其の煩いに使うこと勝るなり。桔梗の下にて云う口伝の如し。「百節の引き攣るに」。私曰く、陰経の痛みならば使うべし。口伝。「喉痺に」。私曰く、よく気を通ずる故なり。卒中風の鼻に吹き入れて吐かすもこの心なり。

「シャックリし上気するに、頭痛して脳の内振動するように覚えるに」。私曰く、是は少陰の経の引薬なり。少陰の頭痛は何時くともな

く脳の内、痛んで堪え難きものなり。是を苦頭痛とも云う。其の時に用いれば誠に神の如くに効くなり。脳の内を滞りを開くなり。「血のある月の煩いに」。私曰く、目付けは脳の痛みと、脳の内を滞りと、陰経に寒邪のあるを散ずと心得るべし。

(毒)：「多く用いる事、また佐使なしして用いれば気を散ずる事甚だしくして乱悶するなり」。

徴：宿飲停水を主治するなり。故に水気心下に在りて、咳満、或いは上逆、或いは脇痛するを治す。

提要：辛。温。風寒を散じ、停水を行し、頭風脳痛を治す。

考：気味辛温。芳散にして下降す。故に其の能、裏を温め、痰喘を除き、水気を利す。

重徴：宿飲停水を主治するなり。故に水気心下に在りて、発熱、咳満、脇痛する者を治す。

議：味辛温。咳逆を主り、中を温め、気を下し、痰を破り、水道を利し、胸中を開き汗出ず、血行らせずを治す。

養生：風寒を散らし、停水をめぐらし、咳逆を退け、中焦を暖め、脇痛を治す。

サンシシ 山梔子 (クチナシ)

増補：「味苦く寒。心・大腸・小腸・胃・膀胱の六経に入る。熱の心痛に」。私曰く、丹溪が心痛を治するには必ずこの薬を用いたるとみえたり。口伝。「吐血・衄血に、血の混じりたるしぼり腹に、下血に、血をす

る淋病に」。私曰く、この薬、淋病に用いるに深き意あり。淋病は五淋共に熱より生ず。この故にこの薬をば何れの淋病にも用うべし。

「疝気の熱に、胸いきり苦しみ寝うる事ならざるに、傷寒癒えて後また起こるに余熱にも用う、上気の頭痛に、目赤く腫れ痛むに、黄疸に、消渴に、酒毒に」。私曰く、この薬は肺・大腸の熱に使うと心得るべし。上気の煩いにおおかた離さずぞ。小便も能く通ずる能あり。口伝。また理慶曰く、胸のいきり悶え、狂乱の如くなるに用いて常にしるしを取る事、神の如し。色々口伝ある薬ぞ。気鬱の熱気に必ず用う。

(毒)：「おおかた冷えたる人には斟酌すべし」。

提要：苦。寒。三焦の鬱火を瀉し、心痛・吐衄血を治す。

考：味苦く涼し。芳臭有り、升降を為す。故に生に用いるときは則ち能く懊を湧出し、炒り用いるときは則ち能く心中煩熱を除く。

薬選：目赤熱痛、胸心大熱、面赤、心煩、溺道熱痛、黄疸、上部内外を療ず。頭疼、耳鳴。

重徴：心煩を主治す。兼て身熱発黄を治す。

議：味苦寒。胸心・大小腸の大熱、心中煩悶を療じ、小便を通じ、五種の黄病を解し大病を治し、労復を起こす。

養生：心煩を主治し、熱を瀉し、吐血・鼻血・充血・黄疸を治す。

壺中：花粉症などで眼の炎症、腫痛の激しい場合には、梔子薬皮湯を外用する。

ジオウ 地黄

増補：生地黄：「味甘く寒。心・肝・脾・肺の四経に入る。血熱を治す。産後に血昇りて胸を責め絶え入らんとするに、産前の時に子の動くに、下血に、鼻血に、吐血に、五心の熱に」。私曰く、五心とは手足の裏と胸とを云うなり。この薬は血熱を冷ますと心得て使うべし。また夜な夜な熱気さし、日暮れる程に熱気するにも用う。また心熱の煩いに用いる事多し。潔古老人は傷寒の初発の熱気に用いられたぞ。久しき傷寒には勿論なり。尚口伝あり。

熟地黄：「味甘く微寒。酒にて蒸す程に微寒。心・肝・腎の三経に入る。腎水を益す。虚熱に」。私曰く、この熱は虚熱なり。実熱には黄芩、黄连などを用う。生地黄もよし。「劳瘵に、産後の熱気に、産前の熱にも用う。耳の鳴るに」。私曰く、腎虚より起こるによし。痰風などにはまた餘の薬あり。「月水の来ずに、劳瘵の寒熱往来に血脈をよく通ず」。私曰く、熟地黄は劳瘵の本薬なりと心得るべし。他流には腎虚の薬に胡椒・肉桂などを用う。丹溪流には左様の薬をば、火に薪と云いて、殊の外戒めたぞ。只常に熟地黄を以て腎水を湧かすようにするものなり。劳瘵の証は腎虚より起こる故にこの薬を本薬とするなり。

(毒)：「脈遅には脾胃衰え食進み難きに、吐逆に」。私云う、熟地黄は柔らかなる故に生地黄ほど忌まぬなり。

徴：血証及び水病を主るなり。

提要：甘。寒。生血涼血。調経安胎。

考：味甘く滋潤涼降。故に其の能、渴を滋し虚を補い、諸熱を解し、瘀血を消す。

重徴：血証及び水病を主るなり。

議：味甘寒。寒熱積聚を除き、痺れを除き、大小腸を利し、血脈を通じ、驚悸、労劣吐血、鼻衄、婦人崩中血運を治す。

養生：血分の熱を瀉し、血を生じ、経脈をととのえ、胎を安じ、秘結を潤す。

シャクヤク 芍薬

増補：「味苦く酸く微寒。足の厥陰肝経に入る。腹の痛みに」。私曰く、腹の痛みには必ず用うべし。冷えより発るには肉桂・生姜などを加え、熱より発るには黄芩・黄蘗などを加うべし。「下り腹、しぼり腹ともに」。私曰く、味酸くは腹中を和らぐる故に瀉痢ともに用いるぞ。

「後重に、瘧に」。私曰く、瘧は脾胃より発る事多し。この薬は腹中を調える故に瘧に用いるぞ。また云う、酸く寒にして寒熱往来を治する故に瘧によし。「衄血に、脾胃の熱気に、血脈を調う、血を吐くに、五淋に、瘡熱に、痘疹の熱気に」。私曰く、この薬は能く血熱を冷まし腹中を調うと心得るべし。猶口伝あり。曰く、気虚の人に用いる事あり、味酸して物をあつむる故ぞ。白芍薬、赤芍薬の使い分けあり。赤は血の方に、白は脾胃を調えるぞ。手足の太陰に入る。

(毒)：「血少なく寒たる人に、脈沈にして遅に、初めて子を産みたる人に」。

薬選：腹痛、痢疾、目赤、疝瘕、寒熱、傷風寒を療す。腸胃を利す、悪血を散じ、痔疾を治す。癰疽内托、婦人血閉、痘瘡解。

徴：結実して拘攣するを主治するなり。傍ら腹痛、頭痛、身体不仁、疼痛、腹満、咳逆、下利、腫膿を治す。

提要：苦。平。血脈を和し、陰気を収め、中を緩め、痛みを止める。

考：気味苦く収降。故に善く痞塞を排し、気血を順し、肌膚及び虚脱を固める。以て腹痛、攣急及び失精等を治す。

重徴：結実して拘攣を主治するなり。故に腹満、腹痛、頭痛、身体疼痛、不仁を治す。兼ねて下利、煩悸、血証、癰膿を治すして急緊するを緩する。

議：味苦平。血痺を除き、堅積を破り、痛みを止め、中を緩め、悪血を散じ、蔵府の擁気を通宜し、女人の一切の疾、並び産前後の諸疾を治す。

養生：血脈を和し、陰気を収め、中焦を緩め、拘攣をとく。そのため腹痛、下痢、身体の疼痛を緩解する。

長沢：中国で白芍、赤芍を分類するようになったのは宋の時代からで、唐以前は全部芍薬という表現になっている。

壺中：原則として洗い過ぎず余計な加工をしない生薬を尊ぶ。重質で香り高いものがよい。色が白いほうがよいとは限らない。漂白しているものもある。また香川修庵が『一本堂薬選』でいうように、芍薬は赤も白も区別する必要はない。

ジュツ 朮

増補：白朮：「味苦く甘く温。足の太陰脾、足の陽明胃の二経に入る。胃を温めて食の滞りを消し、また能く食を進めて脾胃を調う。心腹脹満するに、腹中冷えて痛むに、胃の腑虚して腹下るに、湿気を除き、気を益し、痰を去り、小便を通ず」。私曰く、この薬は腹中を調え温め、湿気を去ると心得て使うべし。故に下り腹、脹満、水腫などに必ず用

うるものなり。霍乱、吐逆、腹の痛みにも大略はずさず用いるなり。気を調える薬に用いる心は、腹中を調えれば気必ず生ずる故なり。四君子湯の内に入れたぞ。

蒼朮：「性味、能毒、大略白朮に同じ。変わるところはよく汗を出し、風を去り、鬱気を散するなり」。私曰く、白朮は汗を止めるぞ。是が殊の外の変わりなり。気を補う事あるまいぞ。この故に発散の薬の内に多く用いたぞ。白朮は柔らかなるものなり。蒼朮は古根といえり。また一説には同じ物にてはなしといえり。とにかく白く柔らかなるを白朮と心得、黒く堅きを蒼朮と使うべし。酒毒を消し、湿気を燥かす薬ぞ。

(毒)：「腎水燥き少なきには、脈数なるには」。私曰く、燥きたる者に忌むと心得ればよし。瘡を煩う人には気虚すといえども斟酌すべし。膿を生ずる故なり。

薬選：腸胃を燥し、泄瀉を止め、尿道を和す、自汗、盗汗を止め、傷食吐瀉止まず、胎を安じ、湿を除き、腸胃を堅む。

徴：利水を主るなり。故に能く小便自利、不利を治す。傍ら身疼煩、痰飲失精、眩冒、下利、喜唾を治す。

提要：胃を燥し、湿を除き、鬱を散じ、痰を逐う。

考：味微に苦く辛温。気芳烈。故に能く胃気を開き、湿水を瀉し、尿道を調利せしめ、古人、茯苓と並び用いて、以て心下の水満、浮腫、小便不利等を治す。

重徴：利水を主る。故に小便不利、自利、浮腫、支飲冒眩、失精、下利を治す。兼ねて沈重、疼痛、骨節疼痛、嘔渴、喜唾を治す。

議：味苦温。風寒湿痺を主り、胃を開き、痰涎を去り、下泄を止め、小便

を利し、心下急満を除き、腰腹冷痛を治す。

養生：利水を主り、湿をとり、胃内の停水をとり、下痢を止め、嘔渴を治し、身体の疼痛、口中に唾の湧くのを止める。

壺中：蒼朮は白い綿のような結晶がでるものを選ぶ。剪定ハサミで切ってみるとしんなりと切れ、刃に油がつくものが佳品である。白くても潤いなくぱさぱさするものは不可。

ショウキョウ 生姜（生のひね生姜）

増補：「味辛く甘。微温。腹中を温め気を散じ快くし、胃の気のかいなきを助け、同腑下がりを開き、食を進む。霍乱の心腹の痛みに」。私曰く、霍乱に限らず心腹の痛みには大方用いるたるがよきぞ。「吐逆の神薬なり」。私曰く、必ずこの薬を用いる事は諸薬を胃の腑へ引き入れ、腹中を温むると心得るべし。

(乾姜)：「味辛く大熱。能毒大略生姜に同じ」。変わる処は大熱にして気を散らす事甚だし。痰を去るの神薬なり。生姜もまた痰を能く去るなり。産後の熱をさます。口伝。

(毒)：「陰虚火動に、脈実数なるに」。私曰く、辛熱なる故に熱病に忌む。

薬選：風寒湿の邪気を発散し、汗を出し、嘔吐を止め、痰喘、咳嗽、胃を開き、諸薬を調和す。

提要：辛。温。表を発し、寒を散じ、痰を豁き、嘔を止める。

考：気味辛く温。而して質能く堆排す。故に痰を開き、胸を利して、以て嘔吐を止めるを取る。橘皮、半夏及び理気の方中に入れて、以て各薬の巧を佐く。

- 議** : 味辛温。嘔吐を止め、痰を去り、気を下し、煩悶を散じ、胃氣を開く。
- 養生** : もどすことを主治し、胃を開き、表を発し、寒を散じ、痰を取り、おくびを止める。
- 長沢** : 胃内停水のあるとないで半夏と生姜の使い分けができるのではないかと思います。生姜は温薬、乾姜は熱薬です。
- 壺** : 乾姜の項を参照すべし。吐き気などが強い場合は八百屋で売っているヒネ生姜を使う。

セッコウ 石膏

- 増補** : 「味辛く甘く寒。手の太陰肺、足の陽明胃の二経に入る」。私曰く、書に微寒と云う説もあり、大寒と云う説もあり。微寒と云うは味を以て書きたり。大寒と云うは能を以て書いたぞ。当流には大寒の心にて恐るるなり。清法院などは微寒の心にて用う。尚口伝。「傷寒の甚だ頭痛して熱気盛んなるに」。私曰く、傷寒の頭痛して熱気ある事は常の事なり。率爾には用いるべからず。大熱して了見なくば用いるべし。陽明の発熱にも用いるべし。陽明の傷寒のは其の病門にて沙汰すべし。「陽明の経の頭痛に、日晡潮熱に」。私曰く、日晡は申の時なり。「大渴して湯水を飲むに、炎暑にあたって潮熱するによく汗を出す」。私曰く、此の薬は古人も甚だ吟味したり。丹溪は性軽き故にしいて恐れず。今心得るべきは、恐るべきには恐れ、恐れまじきには恐れるべからず。恐るべきとは一身熱ありとも胃の腑に熱なくは恐るべきなり。胃に熱ありとも胃の氣弱くは恐るべきなり。恐るべからずとは胃の腑に熱有るを云うなり。此の時は多く用いても苦しからず。多く用いる

べきに少し用いるも恐るるなり。ただ胃の熱に用いると目付けすべし。本経の諸能皆胃の熱なり。汗を出すと云うも、味辛く甘くして内熱を押し出す故なり。潮熱と云うに心得ようあり。熱のあるところ定めるを云うなり。是は胃の腑に定まって有る熱ぞ。

(毒)：「よく胃を冷やす故に人をして不食ならしむ。腹に大熱なくば軽く用いず。およそ諸病に脈の数、何としても退かずは此の薬を用うべし」。私曰く、後には諸熱腹に入る故になり。「胃弱くは用うべからず」。私曰く、腹に熱ありとも忌むべし。

薬選：傷風寒、時疫の大熱、口乾、大渴引飲、舌に黄白胎有り、皮膚熱くして火に燥すが如く、夏時の熱病、熱瘡、潮熱、狂証、胃熱口瘡、牙疼、咽痛を療ず。上気・目痛・耳鳴り・頭疼。

徴：煩渴を主治するなり。傍ら譫語、煩躁、身熱、頭痛、喘を治す。

提要：甘辛淡。大寒。心を寧し、肝を涼し、熱を清し、火を降し、津を生じ、渴を止める。

考：其の体重く、鎮墜。性大寒。故に能く煩熱を逐い、胃中を清くし、燥渴を止め、或いは桂枝と同じく用いるときは、則ち裏熱を逐いて發表を致す。大青竜。白虎加桂枝の類、是なり。或いは桂枝無きときは、則ち唯だ下降を致して發表すること無し。麻杏甘石。越婢の類、是なり。前人は石膏は肌を解し汗を発すと謂うは非なり。尚麻杏甘石の証、以て徴すべし。

重徴：煩渴を主治するなり。兼ねて譫語、煩躁、身熱、頭痛、喘を治す。

議：味辛寒。中風寒熱、口乾舌焦を主り、大渴引飲、中暑潮熱、牙痛を止め、発斑、発疹の要品と為す。

センキュウ 川芎

増補：「味辛く温。頭痛に」。私曰く、頭痛には其の品多けれども、何れの頭痛にも必ず用いるなり。気虚の頭痛には少し斟酌あるべきか。但し頭痛甚だしくは気虚なりとも補薬の内に少し加えて用うべし。「能く血を生ず」。私曰く、厥陰の経の本薬なり。「気を順らし鬱気を散ず、冷えて痺れ筋引き攣るに、脳の内冷えて痛むに、頭の内血滞るに、中風に」。私曰く、此の薬は気を散ずる事、風の塵を吹くに似たり。一薬を服まする事あるべからず。方の内にも常に多くは用うべからず。厥陰の経の本薬にして血を温むると心得て使うべし。

(毒)：「気の衰えたる人には頭痛ありとも、熱気強きに」。私曰く、熱気に忌めども、頭痛甚だしくは使う事あり。其の病に望んで分別すべし。かような事はあらかじめ定め難し。諸薬皆同じ。

薬選：黴瘡、下疳、便毒、久瘀血、結毒、諸瘡、疥癬、癰疽を療ず。膿を排し、眼疾、結毒の頭痛、腰脚軟弱、手足筋攣、膿淋、血淋、婦人の血閉、胎衣下らず、難産腹痛、生を催す、一切の黴毒、結滞、周身筋骨疼痛、諸患皆治す。宿血を破り新血を活かす。

提要：風湿脳に入り、頭疼寒痺を治し、血を補い燥を潤す。

考：其の気味辛温芳烈。故に上は頭脳に達し、下は瘀血を破り、気血を順するの能有り。以て頭痛、腹痛、★痛、経閉、諸瘡毒を療ず。

議：味辛温。頭痛、金瘡、血閉、心腹堅痛、半身不随、鼻洪、吐血及び溺血を主り、膿を排し、気を行らし、鬱を開く。

養生：当帰と併用して虚証の血毒をとり、血を補い、燥を潤し、頭痛、寒痺を知す。

中薬：気を行らし鬱を開く、風を去り湿を燥かす、血を活かし止痛する、の効能がある。風冷による頭痛眩暈、脇や腹の疼痛、寒による筋の麻痺、無月経、難産、産後阻塊痛、癰疽瘡瘍を治す。

ソヨウ 蘇葉 (シソ)

増補：「味辛く温。風寒の皮膚にあるに、風寒の頭痛に、肺鬱の脈浮大にして咳嗽するに」。私曰く、鬱は滞りの名なり。是肺の臓に風熱滞り、シワブキをなすなり。此の故に、表を発し気を引くの薬にて、鬱を開き風を散ずるなり。大熱病に火鬱湯を用いる心なり。其の心にてなくんば久咳に用いず。「気を巡らし、気を下し、喘息を鎮め、痰を消す」。私曰く、是皆気を巡らす能ある故ぞ。但風の心を兼ねずんば、此の証ありとも使い難し。またかようにはいえども風なくとも時によって紫蘇の力をかりる事多かるべし。口伝。「中を広くし胃を開いて食を進む。霍乱の吐逆に」。私曰く、これ皆中を開く能ある故ぞ。「脚気に、湿痺に、風湿を去るぞ」。按ずるに、此の薬は一つに発散して風寒を散じ、二つに気を巡らし、三つに中を調べ、四つに湿を去る。其の中に風を散するを、表の能とすべし。いつも申す如く、表の能、裏の能と云う事あり。裏の能も時によって用いる事多けれども、先ず表を使うと思うべし。理慶の云うぞ、発散の薬多けれども、何れも人の虚証をおもはからねば使い難し。此の薬は一段使いよくて重宝ぞ。何となく汗させんと思うときは、紫蘇を使うべし。また食するときには胃の気開く故に皮膚も開くなり。此の時風寒に当たりて病む事多し。紫蘇を必ず用うべし。佐使に陳皮・桔梗の類なり。またむざと（わけもなく）気悪しく、咳気心のように覚える人をば、少し汗すればよい

ぞ。此の時も紫蘇を用いよ。故に四時の傷寒解利の通薬とするなり。

(毒)：「脈沈細にして自汗・盗汗あるに、中焦虚冷の人に」。私曰く、此の薬は中焦を冷やす性、強からねども散下の力強き故に、虚冷の人に用いれば腹を下して止め難きぞ。

紫蘇子：「味辛く温。気を下し塞がりを通ず、上気のシャックリに、喘息に、シワブキに、痰を消す、心肺を潤す」。私曰く、右の能は皆気を下すのかたより云うたぞ。「中を温む、霍乱嘔吐に、反胃に」。私曰く、此の能は中を温め気を下す内より出たり。按ずるに、此の薬は気を下す第一のものなり。是を表の能とす、目付けぞ。中を温むるは裏の能なり。

(毒)：「脾・肺の気かいなくして落ち入る人に」。

提要：辛。微に温。汗を発し、気を下し、魚毒を解す。子は肺を潤し、気を下し、喘咳を定め、腸胃を寛める。

考：其の味微辛にして芳烈なり。故に逆気を下降し、鬱結を開発するの能有り。

議：味辛温。気を下し、寒を除き、中を寛め、上気、咳逆を主どり、胃を開き、食を下し、魚蟹の毒を解す。

養生：気を下し、汗を発し、魚毒を解く。

壺中：香り高く新鮮なものを使用する。両面が紫のチリメンジソがよい。良品がメーカーにない場合は自作すべし。

ダイオウ 大黄

増補：「味苦く大寒。脾胃・大腸・心・肝の五経に入る。何れの病にても実熱の内にこもり大便の通ぜざるに、心の下壅がりて悶えるに、腹中に宿食ありて消えかねるに、しぼり腹のとき内つまり大便通ぜざる腹痛に、潮熱ありて虚言云うに、瘀血を下し月水を通じ金瘡、或いは人に打たれ、或いは高き処より落ちて悪血内に入り苦しむ人に」。私曰く、此の薬の目付けは気血・痰食・積熱、其の外何にても腹中に滞りてあるとき、下さんと思はば必ず此の薬を用いよ。傷寒七、八日もして、そぞろ寒き事も無き、発熱ばかりあって大便通ぜざるには用いではかなわぬぞ。強き薬性なれば大方の事には斟酌すべし。上焦の瘀血を下すには酒に浸して用いるなり。

(毒)：「大便不通とも脈衰え遅きに」。私曰く、総じて此の薬は脈を以て使うべし。是習いの一つなり。沈にして洪大なるには道三の流には大黄の脈と云えり。「不食するに、吐逆に」。私曰く、此の薬ばかりに限らず、下し薬は吐逆さする事多し。きつく当たる故か。また丸薬の内に用いれば煎薬にして使う程はたたらぬものなり。

薬選：痢疾腹痛、裏急後重、傷寒時疫の潮熱、譫語、熱閉、腸間の結熱、一切の黧瘡、下疳、便毒、一身結毒、関節疼痛、膿淋、痔疾、疥瘡、癬瘡、穴瘡、諸悪瘡、発漏、余毒、黧毒、眼を犯して赤痛、小児口瘡、諸悪瘡、暴赤目痛、小便淋瀝、黄疸、傷食、結胸、腹痛、癥瘕痞疝、宿食溜飲を療ず。老血留結、婦人の瘀血、血閉を下し、小児の遺毒頭瘡、壅滯を泄し、気妨を通ず、腸胃を蕩滌し、陳を推し新を致す。

徴：結毒を通利するを主るなり。故に能く胸満、腹満、腹痛及び便閉、小便不利を治す。傍ら発黄、瘀血、腫膿を治す。

重徴：結毒を通利するを主る。故に能く胸満、腹満、腹痛、大便不通、宿食、瘀血、腫膿を治す。兼ねて発黄、皮語、潮熱、小便不利を治す。

提要：苦。大寒。微毒走りて守らず、腸胃を蕩滌し、燥結を下し、瘀熱を除き、陳を推し新を致す。

考：気味苦寒。毒有り。故に能く大小腸間の実熱を蕩滌し、其の功、最も良將に比すべきや。

議：味苦寒。腸胃を蕩滌し、陳を推し、新を致し、大小便を利し、瘀血を下し、癥瘕を破り、実熱を瀉す。

養生：実証の結毒を主治し、腹満腹痛、大便不通を治し、悪熱、潮熱をとり、血毒、腫膿をとり、発黄、小便が不利するものを治す。

タイソウ 大棗 (ナツメ)

徴：牽引強急を主治するなり。傍ら咳嗽、奔豚、煩躁、身疼脇痛、腹中痛を治す。

提要：甘。温。脾胃を滋し、心肺を潤し、百薬を和す。

考：其の味甜く温、滋潤。故に専ら脾胃を保養し、駿薬を調和す。

重徴：牽引強急を主治する。故に能く胸脇引痛、咳逆上気、裏急腹痛を治す。兼ねて奔豚、煩躁、身疼、頸項強、涎沫を治す。

議：味甘平。中を安じ、脾を養い、胃気を平にし、百薬を和し、心下懸痛を療じ、嗽を止める。

養生：牽引急迫を主治し、胸脇の引痛、咳逆、上気、ヒステリーの発作、腹痛、煩躁を治す。薬性を和し、薬力を身体に分布させる。

壺中：一部のメーカーはわざわざ種を除いて調整してあって、食べるとおいしく、料理にもそのまま使えるので便利かもしれない。しかし大棗は

種にも薬効があるので、全体をそのまま刻んでいるものを使うほうがよい。

タクシャ 沢瀉（オモダカ）

増補：「味甘く鹹く微寒。膀胱・腎・三焦・小腸の四経に入る。膀胱、三焦の滞りたる水を追い下す」。私曰く、此の薬は猪苓より和にして使いよいぞ。小便を快く通ずる事、是より優れたるはなしと思うべし。

「湿熱をもらす、痰飲をめぐらす」。私曰く、痰も湿の類なる故ぞ。さりながら痰の療治は氣を利する事を先とする程に小便の瀉薬を用いる事稀なり。但し事によりてよき療治とならん事もあらんぞ。「湿気によって身の痺れるに、乳の出難きに、五淋に、水腫に、脹満に」。私曰く、猪苓も此の薬も虚証の腫脹には斟酌すべし。但し補瀉の心ここに申すべし。療治の口伝にあり。「陰下濡れてしたるきに」。

(毒)：「久しく服する時は目を損なう」。私曰く、本草に此の薬は目を明らかにすと云えり。其の当座、小便をよく通じ、腎の熱毒を去るほどによきなり。久しく服すれば腎水を減らす故に目を損なう。

薬選：水道を宣通し停水を行利し、膀胱中留垢、消渴、淋瀝、腫脹を消し、溺瀝、腫脹を消し、溺を利す。水痞。

徴：小便不利、冒眩を主治するなり。傍ら渴を治す。

提要：甘淡、微に鹹。平。膀胱に入り小便を利し、湿熱を除き、消渴、嘔吐、瀉利を治す。

考：味微に苦、淡瀼。故に能く畜湿を逐い、水道を宣通するの功有り。

重徴：小便不利を主治す。故に支飲、冒眩を治す。傍ら吐渴、涎沫を治す。

議：味甘寒。痞満、消渴、淋瀝、頭旋を除き、膀胱の熱を利し、尤も水を行らすに長ず。

養生：水毒を排除して冒眩を主治する。また小便の不利を治し、渴を止める。

チモ 知母（ハナスゲ）

増補：「味辛く苦く寒。足の少陰腎經に入る。腎水を増し、肺の火を瀉し、命門の相火の有餘を治す」。私曰く、命門は右尺なり。左腎の水、虚耗するによって相火盛んになるなり。「腎熱し小便黄赤に、傷寒または久しき瘧の煩熱に」。私曰く、傷寒も瘧も初めての熱には用いず。久しくなりて日暮時に潮熱さし、または夜熱気さし盗汗など出るに用うべし。「消渴、熱中に胎を鎮む、子煩を止むる、心煩し悶えるに」。按ずるに此の薬は陰火を消し、腎水を生ずるなり。此の故に勞瘵・骨蒸の汗あると、陰中の熱には必ず用うべし。右の病証を考えてみよ、腎熱して小便黄なりと云い、胸いきり乱悶すると云い、煩渴と云い、骨蒸と云い、傷寒・瘧の陰分の熱と云い、皆是陰虚火動の証なり。また按ずるに陰分の虚ならば何の経にても使うべし。心熱にも肺熱にも胃熱にもよし。故に強く喉の乾く人には必ず用うべし。

(毒)：「久しく服すれば腹を下すぞ」。私曰く、脾胃にたたる故なり。「妄想を見、精の泄れやすきに、小便のしげきに」。私曰く、此の薬は小便をよく通ずる能ある故に忌むなり。また右の病証、脾胃によって生ずるもの多し。故に忌むなり。また虚冷より起こる人もあり。大いに忌むべし。若し右の証ありとも腎熱甚だしくは加薬して用うべし。

但毒と云う心は用捨のかたをいえるなり。

提要：辛苦。寒。肺胃熱を瀉し、陰気を滋し、腎燥を潤し、消渴を治す。

薬選：嗽、傷風寒時疫の大熱、口燥き、舌胎あり、潮熱、夏時の熱病、熱瘡、胃熱口瘡、牙疼、心煩、妊煩、消渴、熱中、狂証を療ず。

考：味苦甘。故に善く燥渴を潤し、熱結を清瀉する。

議：味苦寒。消渴・熱中を主り、邪気を除き、熱結を療ず。亦瘧熱・煩患を主る。人虚して口乾くには加えて之を用う。

養生：煩熱をとり、枯燥を潤す。

チョレイ 猪苓

増補：「味甘く平。足の太陽膀胱経に入る。腫脹に、腹膨れ急に痛むに、湿を除く、子淋に」。私曰く、身持ちなる女の淋病の事なり。「胎腫に」。私曰く、懐妊の人の水腫を云うなり。目付けは小便を瀉する事甚だしきと知るべし。

(毒)：「久しく服すれば腎気を損ない目を眩ます」。

薬選：水道を利し、膀胱を疏し、渴を治め、腫脹を消し、淋疾、妊淋、妊腫。

徴：渴して小便不利を主治するなり。

提要：甘淡薄。質順降。故に善く水湿を燥し、膈間の水滴を引き、尿道を通利す。

重徴：渴して小便不利を主治す。

議：味甘平。水道を利し、傷寒、温疫の大熱を解し、腫脹満を主り、渴を

治し、湿を除く。

養生：渴し小便の不利を治す。

チンピ 陳皮（ミカンの皮）

増補：「味辛く苦く温。肺、肝、脾、胃の四経に入る。痰涎を去り、上気に、シワブキに、胃の気を開くに、水と五穀と一つに成るを分利す。表の風寒を散ず」。私曰く、この薬は気を散じ、腹中を和らげ、外より来る風寒をも散ずると心得て使うべし。この故に食たたり、吐逆、下り腹、鬱気、また発散薬にはずされぬと見えたぞ。本草綱目には酒毒魚に酔いたるに、くさびらの毒に専用とあり、白身を去れば汗薬、気の方によし。白身を去らぬは腹中の方に使うべし。

(毒)：「自汗、盗汗に、肺虚にして脈沈細なるに」。

トウガシ 冬瓜子（トウガンの種）

提要：味甘平。肝を補い、目を明らかにし、腸癰を治す。

考：味淡甘滑降。故に能く潤行を致して、以て大小便を通利す。

養生：腫瘍を破り、膿を排除する。

トウキ 当帰

増補：「味辛く温。心・肝・脾の三経に入る。血を温め中を温む」。私曰く、およそ一身を温めると心得るべし。「痛みを止み」。私曰く、血さし痛むには是を用い、気のさし痛むには枳殻を用う。さりながら此の薬は十二経を温むる程に気血ともに用いても苦しからず。「肌肉を生じ、血を補う。女人の腰の痛みに」。私曰く、腰の痛みには男女ともに用う。「白血・長血に、脈遅くして手足冷えるに、当帰頭は血を止めて上行し、当帰尾は血を破りて下行す、当帰身は血を和らぐ」。私曰く、此の薬は血を調える第一の薬なり。朝夕手を放さぬぞ。辛温なる故に大方冷えたる人ばかりに用うべきようにみえたれども、血熱の煩にも地黄・犀角・牡丹皮などを加えるべし。血の滞りを破る時は馬鞭草・桃仁・紅花の輩と一つに用うべし。血を下さんと思う時は桃仁・大黃を加えるなり。血を上らさんと思う時は何にても上行の薬を加えるなり。産前産後に大方離さぬぞ。とにかく血を治すの本薬と心得るべし。また諸虚不足の人に用いるなり。口伝。

(毒)：「血熱して腫れ痛むに。脈大にして速きに」。但し温なる故ぞ。

薬選：血を和し、膿を排す。血を止め、滋潤す。目赤腫痛、婦人産後、悪血上衝、崩血漏下、瀝血を療ず。痘瘡内托。

提要：甘。温。血を補い、燥を潤し、内寒を散じ、諸瘡瘍を主る。

考：味甘辛。気大温にして芳発。故に経脈を温達し、気血を調和するの能有り。古人は㠆襠と同じく婦人産後、気血不足、腹痛及び癰疽を療ずるに用う。膿を排し、痛みを止める。

議：味甘温。咳逆を上気、婦人の漏下、心腹の諸痛を主り、腸胃、筋骨、皮膚を潤し、中を温め、痛を止む。

養生：血を補い、裏寒を暖め、諸瘡瘍を治し、虚証の血毒を治す要薬。

壺中：香りが強く、乾燥しすぎずしんなりとしたものがよい。私見では湯揉みの少ないタイプが良品だと思う。また軟膏製造の際は、油分の多いものを大量に使うと良品ができる。

トウニン 桃仁（桃の種）

増補：「味苦く甘く平。足の厥陰肝、手の陽明大腸の二経に入る。瘀血に、血閉に」。私曰く、これも血の滞りたる事なり。「血塊に、胸の下堅きに」。私曰く、瘀血にてなくんば斟酌すべし。「大便の乾いて通ぜざるに、月水の滞りて腹痛むに、産後の悪血滞るに」。私曰く、悪血滞れば、しり腹（産後の腹痛）とて腹痛むものなり。必ず用うべし。按ずるに此の薬は腹中に血滞らば、何れの煩いにも用う。また老人、虚人、血乾いて大便通ぜざるに必ず用う。

(毒)：「瘀血なくば使わず」。

徴続：瘀血、少腹満痛を主治す。故に兼ねて腸癰、及び婦人の経水不利を治す。

提要：苦甘。平。血を破り、燥を潤し、肝気を緩め、大腸を通ず。

考：味苦く甘く。専ら血分を主る。其の能、腸中を潤し、大便を通じて、以て畜血、経水不利、大便秘結等を治す。

議：味苦平。瘀血、血の閉瘕を主る。咳逆上気、疼痛を止め、大便を通潤する。

養生：血毒を駆り、月経を通じ、燥を潤す。

壺中：血の滞りを通ず。脂肪が多いので、枯燥した大便を潤す。軟便には注

意する。

ニンジン 人参

増補：「味甘く微温。手の太陰肺経に入る。何れの病にても気の尽きたる者には有無に用う。脾胃を温めて、胃の気を升ぼす故に中焦衰え気虚して升ぼり難く目の眩すに」。私曰く、目の眩う病、風より発るもあり、痰より発るもあり、其れには用いず、但気尽きて目の眩うに用う。

「喉の燥きを止む」。私曰く、此の薬、温なる故に燥きを止めると云う義はなけれども、気虚すれば身の汗燥きて水を多く飲むものなり。其の時用いるぞ。常の喉の燥きには麦門冬・葛根・知母などの類を用う、人参は用いず。「神気虚し衰え、胸騒ぎするに」。私曰く、胸騒ぎする事、痰より発る者多し。其れには用いず、気虚し衰えたるばかりに用いるぞ。神とは魂の事なり。委しくは口伝あり。「胃の気虚を吐逆するに、久しき咳に、気虚し夢を多く見るに、咳久しからず者には必ず忌む。但気虚甚だしくは遣うべきか」。

(毒)：「腎精虚し、火動するに」。火動するとは上気し、血を吐き、衄血を出し、または労瘵などの事なり。「血燥きたるに、痰多くつかえたるに」。私曰く、血燥き、痰つかえたれども、気虚甚だしきには用うべし。ことさら血多く吐きたる後には必ず用う。独参湯と云う方あるぞ。労瘵にも自然用いる事あり。労瘵には悪しけれども腹中を調うべしと思わば遣うべしか。口伝あり。

薬選：暴脱の元気を回復し、邪気を除き、消渴を止め、煩躁、傷食吐瀉厥逆、短気、少気、腹痛、自汗、津液を生じ、驚悸を止め、瘧疾を治し、中を調べ、気を保つ、諸失血、産後諸虚、痘瘡、内托、大凡卒病の諸虚、

唯参是掌。

徴：心下痞堅、痞鞭、支結を主治するなり。傍ら不食、嘔吐、喜唾、心痛、腹痛、煩悸を治す。

提要：甘。微に寒。大いに元気を補い、津液を生じ、精神の安じ、血脈を通ず。

考：気味甘く微に苦。温潤して餘味有り。故に能く津液を生じ、渴を潤し、陽を益し、虚羸を温補するの功有り。

重徴：心下痞鞭、支結を主治す。兼ねて心胸停飲、嘔吐、不食、唾沫、心痛、腹痛、煩悸を治す。

議：味甘温。微に苦。渴を止め、津液を生じ、能く諸薬の力を達する。

養生：虚を滋潤するにはオタネまたはヒゲを用い、実を瀉すには竹節を用いる。オタネは三焦の虚による心痛、心悸亢進、食思の不振、胃部のつかえ、嘔吐、下痢、腹痛を治す。竹節は胃熱を去り、心下部のつかえ、胃内の停水をとる。

バクモンドウ 麦門冬 (ジャノヒゲ)

増補：「味甘く微寒。心・肺の二経に入る。肺中の伏火を去る」。私曰く、伏火とは熱気久しく滞り、内にこもるを云うなり。「喉の乾くに」。私曰く、甘く寒なる故に、虚勞の人の喉の乾くに。「シワブキを止む」。私曰く、痰出難き、喉乾きたる人のシワブキによし。冷えたる人には忌む。「身の潤い枯れ、乾いて声の枯れるに、肺痿とて膿を吐くに、心気の不足を補い、心熱を去り、血の乱れ狂うに、脈の切れる

に」。私曰く、心熱甚だしくして脈の切れるによし。冷えて脈の切れるには肉桂・当帰よし。此の薬は悪し。「面目手足腫れるに」。私曰く、心熱より腫れるによし。風水の腫れには忌むべし。「精の泄れやすきに、形瘦せて気短きに地黄と同じく用いれば、十二経を潤し血を増し脈を生じ陰を強くし精を益し目を明らかにし神をたもつと云えり」。私曰く、此の薬は肺中の熱気をさます本薬にして、また能く心熱を去り腎水をも増し、身の燥きたるを潤すと心得て使うべし。ことに上焦の乾きたるによし。また心肺の熱気を去る故に乾きたると見ば気血共に用うべし。

(毒)：「冷えたる人に」。私曰く、喉乾くとも腹など下すれば斟酌すべし。其の時は葛根を用いてよし。

提要：甘微に苦。寒。心を清め、肺を潤し、熱を除き、咳を定め、嗽を止める。

考：味淡甘。質滋潤涼降。故に能く胃中を補い、逆気、上衝を降瀉す。

議：味甘平。心腹の結気、胃絡の脈絶ち、羸瘦、短気、客熱、口乾燥渴を主り、嘔吐を止め、痰飲を下し、肺痿、吐膿を治す。

養生：熱を瀉し、枯燥を潤し、せきを止め、気逆を下す。

ハンゲ 半夏 (カラスビシャク)

増補：「味辛く苦く微温。手の太陰肺、足の太陰脾、陽明胃の三経に入る。

胸腹の間に痰熱満ちつかえたるに」。私曰く、痰熱と云うは痰のつかえたる時熱の生ずるを云うなり。其の熱気には温散ならでは散らぬなり、故に半夏を用う。また熱痰と云うは変わりだぞ。痰滞る事久し

くして吐けども出難く、呑めども入り難く、ただ喉の間につかえたるを云う。其れには忌むなり。似たるようにて格別変わりだぞ。畢竟湿痰に宜しく、燥痰に忌むと心得るべし。「シワブキに、上気に」。私曰く、痰なくしてシワブキし、上気するには否なり。さりながら胸中の気を温め散らさんと思う時に二三服は使うべし。「心下の急痛に」。私曰く、心下の急に痛む事、或いは痰より起こり、或いは飲より起こり、寒より起こる事多し。其の時は陳皮・呉茱萸などと同じ心にて使うに妙なり。ただ熱より発る痛みにはばかり忌むぞ。ただ心腹の痛みはいつも口伝する如く大体まず温めたるがよき手立てなる。ままた熱の痛みにも此の薬に呉茱萸・黄連を佐使にして用うべし。尚口伝にあり。

「吐逆するに」。私曰く、吐逆の発る事久しきは知らず、とうぎ発るは大略痰も飲も胃の腑の不火冷氣なり。此の薬、胃を調え痰を去る温散なる故に、陳皮・生姜と同じ心にて使うぞ。甚だ効あり。胃の気を和け開く。脾の湿気を乾かす。「痰せめ上がって頭痛するに」。私曰く、東垣の云く、痰責め上がる頭痛には此の薬に非ずんば去り難し、と云えり。必ず用うべし。「胸の寒を除く」。私曰く、此の薬は湿痰を乾かし散らすを第一にして胸をよく温めるを目付けになし、餘の能を考えて使うべし。

(毒)：「労痰に」。私曰く、労痰とは鬱熱久しくして乾ける痰を云うなり。必ず忌むべし。去りながら痰責め上がる事甚だしくは労痰なりとも、天門冬・括楼根などと同じく用いる事もあり、但し久しくは用うべからず。是もまたいつもの臨機応変を用うなり。「失血に」。私曰く、理慶なども殊の外、乾かす剤とて常に使わず。誠に血性無き人には大半に忌むべし。去りながら今常に捨てて使わぬにてはないぞ。二陳湯に入るほどに今は日用の薬とするなり。

薬選：胃を開き、痰を消し、気を下し、結を散じ、乾嘔を止め、音声を発し、咳嗽、上気、咽喉腫痛、心下堅痞、吐食翻胃を療ず。胸膈中の痞脹痰満を除く。

片玉：痰を消し、湿を燥し、胃を開き、脾を健にし、咳逆、嘔吐を除く。

六八：貝母は肺の燥痰を治し、半夏は脾胃の湿痰を治するなり。

徴：痰飲、嘔吐を主治するなり。傍ら心痛、逆満、咽中痛、咳悸、腹中雷鳴を治す。

提要：辛。温。小毒有り。湿痰の主薬と為す。水飲を利し、逆気を下し、嘔吐を止める。

考：其の味瀋、毒有り。湿滑降。故に能く水気を瀉し、咽喉を利し、以て咳逆、嘔吐を除く。

重徴：痰飲、嘔吐を主治す。兼ねて心痛、逆満、腹中雷鳴、咽痛、咳悸を治す。

議：味辛平。気を下し、胃を開き、痰涎を消し、嘔吐を止め、咳逆、咽喉の腫痛を主る。

養生：悪心して吐くものを治す。また胃内の停水、腹中雷鳴、咽の腫痛、咳の出るものを治す。

ブクリョウ 茯苓

増補：「味甘く淡平。肺・脾・小腸の三経に入る」。私曰く、微寒に行くべきか。「能く小腸を通ず」。私曰く、此の薬も腹中を調え小便を通ずる故に、下り腹、霍乱などに大略白朮と同じく用うると見えたり。ま

た気をも生ずる故に、四君子湯に入りたぞ。「胸騒ぎに」。私曰く、痰または水より発りたる胸騒ぎにもよし。心虚して胸騒ぎするに猶よし。「痰を能く去り熱気を小便より去る」。私曰く、此の薬は小便を能く通ずるほどに湿気の煩いには何れにも用う。腹中を調え気を生ずる故に霍乱、吐逆、気虚の人には絶えず用いると心得るべし。

(茯神)：「性味能毒だいたい茯苓に同じ。変わるところは神気を調える事、茯苓より益したると知るべし。故に一物に驚きやすき人に、胸騒ぎに、物忘れするに、夢を多く見るに」。

(毒)：「多く汗の出る人に、小便のしげきに、強く目のかすむ人に」。私曰く、茯苓に細き筋あり、よく水飛して除けざれば人を盲目にするに云えり、慎むべし。茯苓と茯神との見分けようは、中に芯のあるを茯神とするなり。

薬選：元気を順導し、水道を通暢し、消渴を止め、停水を逐い、胎を安じ、泄を止め、津液を生じ、尿を利し、心下悸、淋疾、水腫。

徴：悸及び肉目閏筋惕を主治するなり。傍ら小便不利、頭眩、煩躁を治す。

提要：甘淡。平。脾を益し、湿を除き、心を補い、水を行らし、魂を安じ、神を養う。

考：気味甘淡。質潤降。故に能く津液を生じ、消渴を止め、また能く痰飲、宿水、嘔逆、煩満等を瀉す。

重徴：水を利するを主る。故に能く停水、宿水、小便不利、眩悸、目戢 動を治す。兼ねて煩躁、嘔渴、下利、咳、短気を治す。

議：味甘平。胸脇逆気、恐悸、心下結痛、煩満を主り、小便を利し、消渴を止め、胃を開き、瀉を止める。

養生：利水を主り、胃内停水、小便不利、眩暈、心悸、小便瀕数、減少、筋

肉の間代性痙攣を治す。魂を安らかにし、神を養う靈薬。

壺中：重量感があり、剪定ハサミで切ると刃に粘りつくものを選ぶ。水に浮くものは不可。

ブシ 附子（トリカブト）

増補：「味辛く甘し。大熱栄衛虚したる上ににわかには風湿を感じ、経絡巡らず手足も不随し、神ほればれとなつて目は明きながら人を見れる事能わざるに、本薬の内に少しこれを加えて用うべし。中風には四物湯が本薬なり、附子を加えるべし。気虚の中風には四君子湯なり。其の時も附子を少し加えるぞ。加える心持ちは本薬の力を強くして十二経を巡らさんがためなり。冷えて痰ある人に」。私曰く、手足も冷え目を回しなどするほどに甚だしくは用いよ。大方のは生姜・肉桂などにてあしらいて此の薬は斟酌すべし。「気厥に」。私曰く、此の煩いは手足冷えて、にわかには倒れ人を見知らぬものなり。卒中風に似たぞ。

「癩癩に、驚風に、腹中冷えて痛むに、中寒に」。私曰く、此の煩いは冷えて大寒の気を感じ、一身すくみ口つぐみ色青くなるものなり。風湿にあたり身すくみ痺るるに、難産日久しくして中寒を陰戸に引きこみて手足冷え上り死せんとする時に、肉桂・当帰の類と 是を用いよ。「冷えて胞衣の下りざるに、冷えより発りたる瘡に」。私曰く、大方ならば斟酌すべし。「胃の腑冷えてシャックリするに」。私曰く、此の薬の目付けはにわかなる煩いの経絡を巡らさんと思うときか、または気衰えたる人には人参・黄耆、血の衰えたる人には当帰・川芎など用いても即時にしるし有り難く思わば、必ず此の薬を加えるべし。加えれば諸薬の力盛んになりて速やかにしるし有るものなり。または

冷えたる人を温めんと思うとき使うべし。大方ならば斟酌す。

(毒)：「熱気ありて脈洪大にして数なるに」。私曰く、委しくは口伝あり。総じて大毒ある薬と心得るべし。「懐妊の人に忌む」。右の口伝と云うたは、熱気に忌むと云うたれども、詰まりたる病に薬の性を強くせんときは脈にも熱気にもかまわず使うぞ。したほどに大方の事には使わぬと云うたぞ。

薬選：中寒、中湿、胃泄、膝痛、脚痺、傷食、吐瀉、厥逆、手足拘攣、久冷痢湿を療ず。中を温め、月閉を治す。乾姜と善く脱せんと欲する気を回す。大力勇走、能く全軀を運らす。心下の痞塞を衝開し、虚汗を止める。胃反。

徴：水を逐うを主るなり。故に能く悪寒、身体、四肢及び骨節の疼痛、或いは沈重、或いは不仁、或いは厥冷を治す。傍ら腹痛、失精、下利を治す。

提要：辛甘。大熱。大毒有り。陽を回らし、経を温め、風寒湿を逐い、能く補薬を引き、不足の気血を復す。

考：**(烏頭)**：気味辛辣、大熱。故に裏中を速く走り、寒淫を逐い、疝痛を温導するの能有り。寒疝臍を遶りて痛む、腹中絞痛、身疼痛等を治す所以なり。

(附子)：気味辛く大温。故に経脈を温め、気血を通じ、以て痿痺及び骨節疼痛、手足厥冷等を療ず。

重徴：水を逐うを主る。故に悪寒、腹痛、厥冷、失精、不仁、身体骨節疼痛、四肢沈重、疼痛を治す。兼ねて下利、小便不利、胸痺、癰膿を治す。

議：味辛温。中を温め、寒を逐い、虚を補い、壅を散じ、肌骨を堅め、厥冷を治し、百薬の長と為す。

養生：陽をめぐらし、風、寒、湿を追うので、身体の麻痺、厥冷、下痢、失精などに用いる。

ボウイ 防已

増補：「味辛く苦寒。十二経に入る。水腫・風腫に、中風に」。私曰く、風ならば用いよ。常には用いず。古方によらばまた用うべし。「手足の引き攣るに、湿熱の脚気に」。私曰く、湿熱のある脚気は必ず腫れ痛むなり、指図して用いるぞ。「腰より下腫れ痛むに、九竅を通ず。二便を通ず」。私曰く、とりわけ小便を通ずる薬なり。「十二経を通ず」。私曰く、下焦の湿気、経絡中に乱れ入りて塞がる時には用うべし。常の血虚等には斟酌すべし。按ずるに此の薬は下焦の湿熱を去ると目付けすればすむぞ。右の証、皆湿熱なり。また硫黄の毒を消す。

(毒)：「小便の繁きに、腰より下の細く瘦せたる人に」。

六八：腰以下、足に至り、血分、湿熱、腫疼、脚気を主る、と云う。

徴：水を治めるを主るなり。

提要：辛苦。平。下焦の湿熱を除き、二便を利す。

考：其の味苦く涼。故に能く尿道を瀉して、以て支飲、喘満、水腫等、当に消散す。

重徴：水を治めるを主る。

議：味辛平。邪を除き、大小便を利し、腠理を通じ、癰腫、悪結を散じ、脚気を洩らし、血水の湿熱を瀉し、風水気を療ずるの要薬なり。

養生：水毒があつてせき、または湿毒のために関節不利を治す。

ボウショウ 芒硝

徴 : 堅を瞽ぐことを主るなり。故に能く心下痞堅、心下石鞭、小腹急結、結胸、燥屎、大便寇を治す。傍ら宿食、腹満、小腹腫痞等の諸般の難解の毒を治す。

提要 : 辛鹹苦寒。燥を潤し、堅を軟らげ、腸胃の実熱を蕩滌す。

考 : 味鹹く微に苦く。質潤降。故に能く燥を潤し、専ら腸胃中の熱結を消す。大黄と同じく用いるときは、則ち熱実、腹満痛、大便難等を治す。

重徴 : 堅を瞽ぐことを主る。故に結胸、心下石鞭、硬満、燥屎、大便鞭、宿食、腹満、小腹急結、堅痛、腫痞等、諸般の解し難き毒を治し、傍ら潮熱、譫語、瘀血、黄疸、小便不利を治す。

議 : 味辛苦大寒。五蔵の積聚、久熱胃閉を主り、邪気を除き、留血を破り、大小便を利す。

養生 : 堅をやわらげ、実を瀉す。そのため心下の堅満、腹満、宿便、少腹の急結を去り、小便を利す。

ボタンピ 牡丹皮

増補 : 「辛く苦く微寒なり。手の厥陰心包、足の少陰腎の二経に入る。骨蒸勞熱に」。私曰く、骨蒸に汗のあるもあり、汗の無くもあり。地骨皮は足の少陰腎、手の少陽三焦に入り、汗ある骨蒸を治す。牡丹は足の少陰腎、手の厥陰心包に入り、汗無きの骨蒸を治するぞ。四物湯に牡

丹を加えて婦人の骨蒸を治するも此の意なり。「血分の伏火に」。私曰く、伏火は陰火なり。陰火は相火なり、古人牡丹を以て相火を治す。六味丸の類ぞ。後人黄蘗を以て相火を治することを知れども、牡丹の効、黄蘗よりも勝ることを知らざるなり。「瘀血・積血に」。私曰く、瘀血・積血は大抵気の結ぼれるによる。気順なるときは血も行り、気結ぼれる時は血滞るぞ。今此の剂苦きは陰火を瀉し、辛きは結気を疏す。血分の要薬なり。「月経を通じ、難産を催す」。私曰く、専ら血を行らすことを主る故ぞ。

六八：血を和し、血を生じ、血を涼し、血を行らし、風痺を除き、無汗骨蒸を主り、相火を清す。古人惟此れを以て相火を治す。故に六味丸に之を用う。後人専ら黄蘗を用い丹皮の功、更に勝れることを知らざるなり。血熱を涼し、滞血を去る薬なり。味辛にして発散の功あり。それで無汗の骨蒸に用うる。さて牡丹皮、知母、黄蘗、何れも火動に用うる薬なれども、其の内に知母は腎火を瀉し、牡丹皮は血熱を涼するを主とす。黄蘗は下焦の熱でさえあれば血熱でも湿熱でも冷ますざれども、黄蘗は燥くものなれば火動の症に、二冬二地と組合せねば使いにくし。知母、牡丹皮より苦寒甚だしきものなり。知母は陰虚の咳嗽を主り、牡丹皮は陰虚の熱を冷ます。

提要：辛。寒。血を和し、癥堅を破り、瘀血を去る。

考：気味辛く微に苦。寒降芳散。故に其の能、血を活し、煩熱・血熱を清涼する。

議：味辛寒。癥堅瘀血を除き、癰瘡を療し、月経を通じ、撲損を消し、腰痛を治し、煩熱を除く。

養生：血熱を和し、結毒を解し、血毒をとる。

壺中：冬にきらきらとした塩のような結晶の現れるものを選ぶ。色は暗いほうがよい。

ボレイ 牡蛎

薬選：盗汗、自汗を止め、夢遺精出を療ず。胸中心下の痞悶。

徴：胸腹の動を主治するなり。傍ら驚狂、煩躁を治す。

提要：鹹。寒。堅を軟らげ痰を化し、脱を収め汗を斂め、水を行す。

考：味淡鹹。質沈降、収肅。故に満溢を除いて滑脱をす。このゆえに胸脇満、宿水及び自汗、盗汗、失精滑瀉を治す。

重徴：胸腹の動を主治するなり。兼ねて驚狂、煩躁、失精を治す。

議：味鹹平。傷寒寒熱、温瘧洒洒、驚恚努気を主り、盗汗を止め、洩精を療じ、心脇下の痞熱を治す。

養生：胸腹の動悸をしずめ、その効はほぼ竜骨に同じ。

マオウ 麻黄

増補：「味甘く辛く温。肺・心・大腸・膀胱の四経に入る。傷寒の頭痛に汗を出す。寒邪肺に入りてシワブキするに」。私曰く、此の薬は汗を出す第一なり。冬の用の正傷寒に用いて表邪を除く事、誠に妙なり。其の外、用いる事は稀なり。尚口伝。

(毒)：「腹中虚し皮膚衰えたる人には甚だ忌む」。私曰く、正傷寒ならでは使えぬ。上は此の詮索に及ばぬか。但し古方によらば冬ならで

も使う。小続命湯に入りたぞ。

徴：喘咳、水気を主治するなり。傍ら悪風、悪寒、無汗、身疼、骨節痛、一身黄腫を治す。

重徴：喘咳、水気を主治す。故に一身黄腫、悪風、悪寒、無汗、自汗を治す。兼ねて頭痛、発熱、身疼、骨節痛を治す。

提要：辛く微に苦。温。汗を発し、風寒を去り、喘咳を治す。

考：気味治辟にして逐達の力有り。故に邪気、壅塞を解して、以て腠理を通じ、専ら水湿を逐い、以て骨節疼痛を除く。乃ち桂枝の發表と併せ用いるときは、則ち能く駿発を致す。麻黄湯、大青龍湯の類、是なり。また石膏の清降と併せ用いるときは、則ち能く水湿を利す。越婢湯、麻杏甘石の類、是なり。其れ麻黄は気薬の駿達なる者なり。然るに前人は単に発汗の薬と為す。余、謹んで之を考えるに、発汗の能有るに非ず。其れ仲景氏曰く、発汗の後、更に桂枝湯を行なうべからず。汗出でて喘し、大熱無き者は麻杏甘石湯之を主る。以て徴すべきなり。

議：味苦温。表を発し、汗を出し、邪熱気を去り、咳逆上気を止め、寒熱を除き、傷寒を療じ、肌を解すの第一なり。

養生：表位に実する邪を追う。そのためよく汗を出し、風寒をとり、喘咳、水気を治す。

モクツウ 木通 (アケビ)

増補：「味辛く甘く平。肺・大腸・小腸の三経に入る。九竅・血脈・関節を通ず。声を出す、乳汁をいだす、五淋に、水腫に、瘡腫の痛みに、心

煩して常に眠るに」。私曰く、水気心下にある故なり。按ずるに此の薬はよく小便を通ずるものぞ。其の外、別の処に用いることなし。物の塞がるを通じて痛みを去り、熱を去るも、小便を通ずるよりきたる能なり。

(毒)：「自汗甚だしきに、小便多く繁きに」。

薬選：尿道を利し、九竅を利し、関節諸結、黴毒結滞、淋疾、水腫、黄疸、乳結。

提要：甘辛。平。湿熱を除き、小便を通じ、関節を利す。

考：其の味苦降。故に九竅を開き、尿道を通利す。以て淋瀝、小便不利等を治す。

議：味辛平。九竅の血脈、関節を通利し、小便を利し、水腫浮大を主り、煩熱を除く。

養生：血脈を通じ、湿熱不通の気を通じ、関節を利す。

ヨクイニン 薏苡仁 (ハトムギ)

増補：「味甘く微寒。肺・肝・脾・胃・大腸の五経に入る。筋の引き攣りに、風湿にあたり身痺れるに、湿より起こる脚気によく食をすすめ、胃を増し、肺を補い、熱をさます。肺痿の病、膿血を吐き咳嗽するに」。私曰く、この薬は風湿熱を去る薬なり。諸能是にてすむぞ。古道三の書には何れの病にてもあれ、筋引き攣ると云うにはこの薬と木瓜と離さぬと見えたり。其の心を按ずるに、筋の引き攣りは皆痺の類なり。経に風寒湿の三気合つて痺となると云うより見たてぬるが、今は是に

関わるべからず。筋の引き攣るも病証を見分けて、血虚より来たらば血を増すべし、湿ならば湿を逐うべし。但し湿より起こるもの、十に七つ八つはありと心得るべし。

(毒)：「冷えて筋引き攣るに、中焦極めて冷えたる人に」。

徴：浮腫を主治するなり。

提要：甘淡。微に寒。湿を滲み、水を瀉し、脾を健する。

考：味淡甘、滑降。故に能く脾胃を扶け、水気を瀉し、湿痺を除く。

重徴：癰膿を主治す。兼ねて浮腫、身疼を治す。

議：味甘く寒。筋脈の拘攣、風湿痺を主り、気を下し、腸胃を利し、水腫を消し、熱を清くし、肺痿、肺氣にて膿血を吐するを主る。

養生：排膿を主とし、関節の浮腫を利し、皮膚の甲錯を治し、身体の疼痛をとり、血毒を解き、疣を治し、肌を白くする特効がある。

リュウコツ 竜骨

増補：「味甘く微寒。足の少陰腎経に入る。精の洩れやすきに、虚汗の止まり難きに、下血に、長血に、物忘れするに、物に驚きやすきに、小便の保ち難きに、泄瀉止まり難きに、神を安じ気を正す」。私曰く、この薬は性渋って気を正す。故に神気を補う。虚して脱漏の証には何にも用ゆべし。この物は誠に鱗中の霊長なり。

徴：臍下の動を主治するなり。傍ら煩驚、失精を治す。

提要：甘生。微に寒。浮越の気を収め、精を生し、腸を固め、驚を鎮め、癰を治す。

考 : 其の体重くして性収斂。故に能く滑洩を止め、亡血を理め、精神を鎮め、虚脱を固くするの功有り。

重徴 : 臍下の動を主る。兼ねて驚狂、煩躁、失精を治す。

議 : 味甘平。小児の熱気驚癇、心腹煩満を主る。夢寢洩精、小便洩利を療ず。

養生 : 驚狂、煩躁を鎮め、失精を止める。